名古屋市文化財調査報告38

埋蔵文化財調査報告書29

正木町遺跡
(第7次～第9次)

1998

名古屋市教育委員会

例　言

1．本書は名古屋市中区に所在する正木町遺跡の第７・８・９次発掘調査報告書である。

2．調査は名古屋市教育委員会が実施した。発掘調査に係わる調整事務は市教育委員会文化財保護室が、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館が担当した。

3．各次発掘調査の地点、期間、原因、対象面積、担当者は以下の通りである。

第７次発掘調査

調査地点	中区正木二丁目804
調査期間	平成９年４月７日～４月22日
調査原因	倉庫建設
調査面積	約80㎡
担 当 者	水野裕之・田原和美

第８次発掘調査

調査地点	中区正木二丁目1119-3
調査期間	平成９年９月１日～10月３日
調査原因	個人住宅建設
調査面積	約80㎡
担 当 者	伊藤正人・伊藤厚史

第９次発掘調査

調査地点	中区正木二丁目12　正木公園内
調査期間	平成９年11月25日～12月19日
調査原因	防火水槽建設
調査面積	約100㎡
担 当 者	野澤則幸・田原和美

4．本書では、基準高は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を、座標系は建設省告示の第Ⅶ座標系を使用した。

5．各次発掘調査および本書の作成にあたり、下記の方々のご教示、ご協力をいただいた。
記して謝意を表する。(順不同・敬称略)

尾野善裕・今井静夫・林　順一・稲垣美生

6．出土遺物や調査にあたり作成した実測図・写真類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

7．本書は各次調査担当者の助力を得て、伊藤厚史（第Ⅲ章）、田原和美（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章および付編）が執筆した。編集は田原が担当した。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と概要

1．遺跡の位置と環境 …… 3

2．調査研究史 …… 3

第Ⅱ章　第７次調査の概要

1．調査の経過 …… 7

2．土層 …… 10

3．遺構と遺物 …… 10

4．小結 …… 14

第Ⅲ章　第８次調査の概要

1．調査の経過 …… 15

2．調査の成果 …… 15

3．小結 …… 27

第Ⅳ章　第９次調査の概要

1．調査の経過 …… 31

2．土層 …… 33

3．遺構と遺物 …… 34

4．小結 …… 40

付編　近世以降の正木町遺跡付近の様相 … 41

参考文献一覧 …… 44

表

第１表　遺跡一覧 …… 4

第２表　正木町遺跡調査年表 …… 6

第３表　伊勢山中学校遺跡調査年表 …… 6

第４表　土層観察表 …… 9

第５表　７次調査検出遺構一覧 …… 11

第６表　７次調査遺物観察表 …… 11

第７表　８次調査ピット一覧表 …… 19

第８表　待避所収容人数 …… 28

第９表　９次調査検出遺構一覧 …… 37

第10表　９次調査遺物観察表 …… 40

図版

第Ⅰ章

第１図　遺跡の位置 …… 3

第２図　調査地点位置 …… 3

第３図　周辺の遺跡分布状況 …… 4

第４図　過去の調査地点 …… 5

第Ⅱ章

第５図　遺構平面図 …… 8

第６図　基本土層断面図 …… 9

第７図　ＳＫ01断面図 …… 10

第８図　ＳＸ01出土遺物 …… 12

第９図　包含層上層出土遺物 …… 12

第10図　包含層下層出土遺物 …… 12

第Ⅲ章

第11図　遺構平面図 …… 17

第12図　土層図 …… 18

第13図　待避所 …… 20

第14図　刻印拓影 …… 21

第15図　遺物実測図 …… 22

第16図　遺物実測図 …… 25

第17図　待避所の構造と調査事例 …… 29

第Ⅳ章

第18図　遺構平面図 …… 32

第19図　基本土層断面図 …… 33

第20図　ＳＸ01遺構状況図 …… 35

第21図　出土遺物 …… 38

付　編

第22図　天保年間（1830～1844）年頃の様子 … 42

第23図　明治18（1885）年頃の様子 …… 42

第24図　昭和８（1933）年頃の様子 …… 43

第25図　空襲による焼失範囲 …… 43

第26図　戦前・戦後の区画の違い …… 43

第Ⅰ章　遺跡の位置と概要

1．遺跡の位置と環境

正木町遺跡は、現在の名古屋市中区正木一・二丁目および古渡町の一部にかけて所在する。その範囲は東西約330m、南北約300mにわたると推定されている。遺跡は、名古屋市域の中心部の洪積台地（通称・名古屋台地）上に位置している。

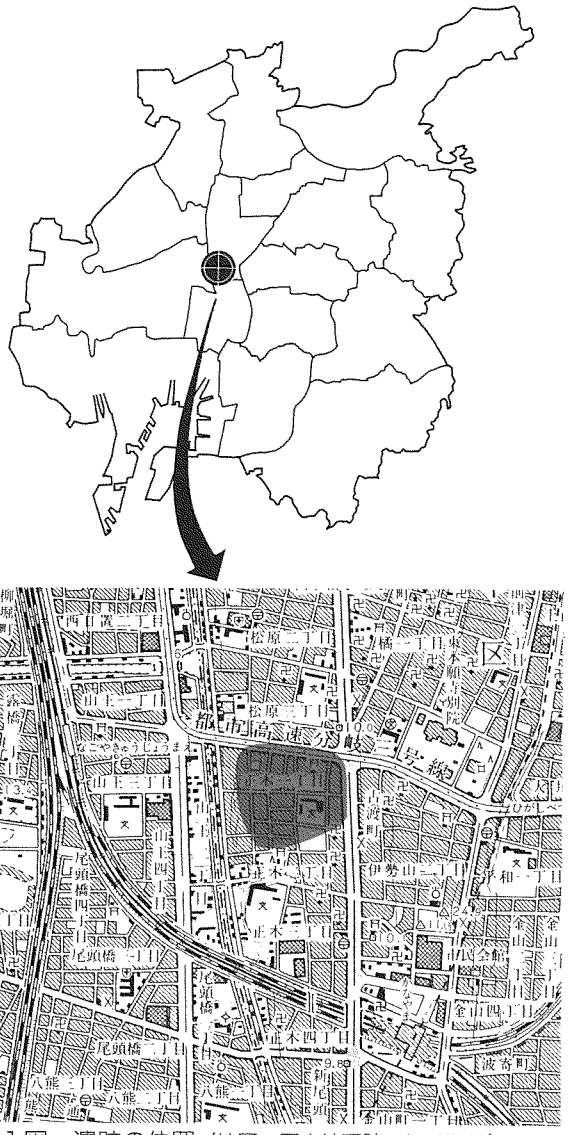
名古屋台地は河川の浸食等によって開析されており、那古野・熱田・御器所・瑞穂・笠寺の小台地に区切られるが、遺跡は南北に展開する那古野～熱田台地の中ほどにある。台地の西縁下には名古屋城築城の際に掘削された堀川が流れ、台地の北・南端にはそれぞれ名古屋城・熱田神宮がある。

この台地上には著名な高蔵遺跡をはじめとして多くの遺跡が確認されている（第３図・第１表）。正木町遺跡も含め、多くは台地の端部に存在しており、時期が降るにつれて台地内部が開発されてきた様子が窺える。周辺の遺跡には時代的にも性格的にも良く似たものが多い。特に、正木町遺跡に南接する伊勢山中学校遺跡は本来的には同一の遺跡と考えられている。さらにその南に展開している尾張元興寺跡や同時期の墓域である東古渡町遺跡などもあわせて、この付近の古墳～奈良・平安時代の集落像を考える上でこれらの遺跡の関係は注目に値する。また、中世にはこの付近で多くの城館が営まれた模様である。その代表的なものが現在の真宗大谷派名古屋別院（東別院）に存在した古渡城跡である。正木町遺跡でもこの時期の溝状遺構が見つかっており、該期の付近の土地利用などを知るには欠かせない遺跡である。

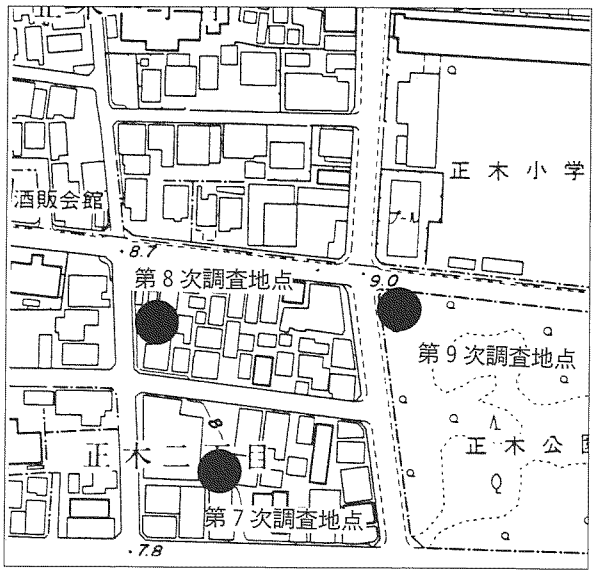
2．調査研究史

正木町遺跡は、推定範囲の北西部に貝層がみられ、その為かつては正木町貝塚と呼ばれていた。

1951（昭和26）年北村斌夫氏がこの地点で調査



第１図　遺跡の位置（地図＝国土地理院、1：25000）

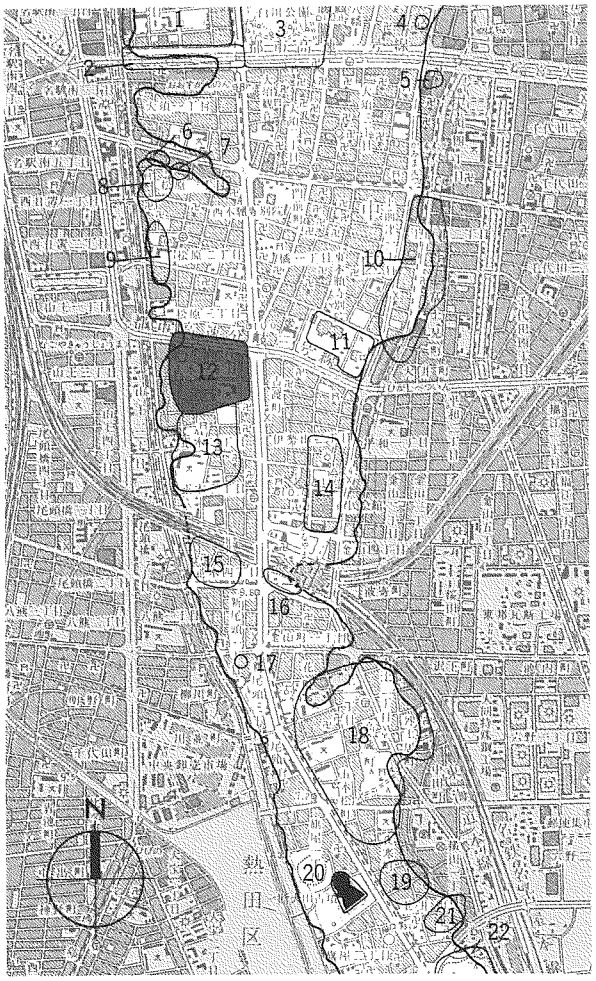


第2図　調査地点位置（地図＝都市計画図、1：5000）

を実施したのを嚆矢として、1952（昭和27）年と1995（平成７）年には南山大学によって、1969（昭和44）年には伊藤禎樹氏によってそれぞれ調査が行われている。名古屋市教育委員会による調査は、1982（昭和57）年に実施した試掘調査を始めに、これまで６次にわたって調査が行われている（第４図・第２表）。

遺物は、縄文時代から現代に至るまで幅広く出土しており、内容も豊富である。特に本遺跡では、滑石製模造品や初期須恵器、「黒見田」の文字が刻まれた須恵器、陶馬などの陶製品といった、名古屋市域では稀な遺物が出土しており、注目されている。遺構は市教委第５次調査（1995）で検出した弥生中期後半の方形周溝墓と思われる溝が今までのところ最も古く明確な遺構である。しかし、それ以前の様子は現在までのところ不明である。ただ、伊勢山中学校遺跡ではこの時期の住居址が発見されており[1]、墓域として利用されていた可能性は指摘されている[2]。以降の時期については、古墳時代の住居址11軒、奈良・平安時代の住居址７軒と井戸状遺構、中世の井戸状遺構・掘立柱建物・溝などがこれまでに見つかっている。また第５次調査では、詳しい年代は不明だが、古代の巨大な掘立柱建物が３～４軒確認されている。全体的に遺物・遺構ともに古墳時代～奈良・平安時代に検出例が集中しており、遺跡の中心時期と言えよう。

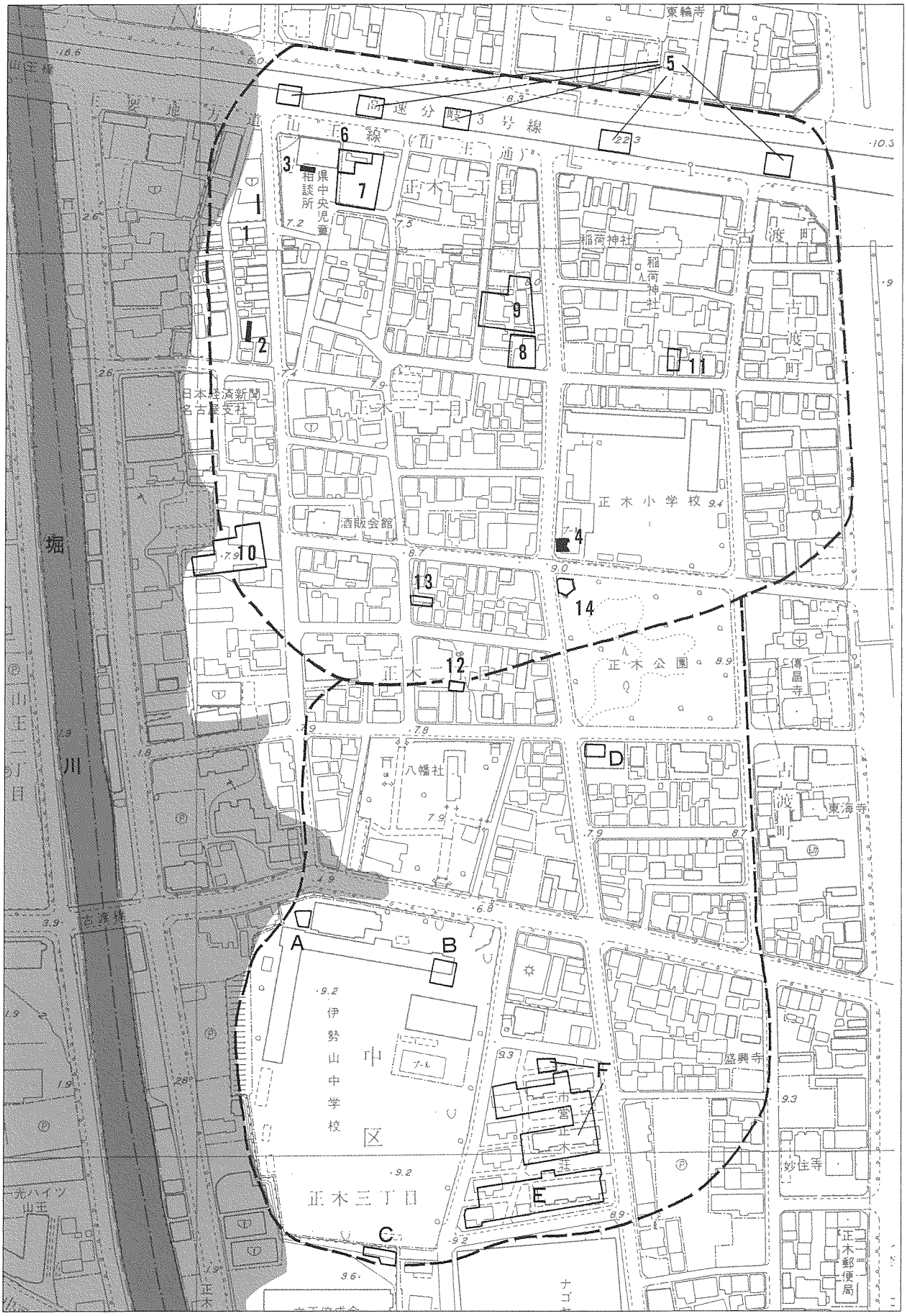
また、南接する伊勢山中学校遺跡では、これまでに６回調査が行われている（第３表）[3]。なかでも、第５次・第６次調査では古墳時代～奈良・平安時代の住居址や遺物が良好かつ豊富に出土しており、正木町遺跡の成果とあわせ、該期の集落像を探る重要な資料となっている。



第３図　周辺の遺跡分布状況（S＝1/20000）

	遺　跡　名	時　　代
1	竪三蔵通遺跡	旧石器～近世
2	旧紫川遺跡	縄文～近世
3	白川公園遺跡	弥生～近世
4	南大津通遺跡	弥生
5	小林城跡	戦国
6	岩井通貝塚	縄文・弥生・中世
7	西脇町遺跡	弥生
8	旅籠町遺跡	縄文・古墳・中世
9	松原遺跡	弥生・古墳・中世
10	富士見町遺跡	弥生～近世
11	古渡城跡	弥生・戦国
12	正木町遺跡	弥生～近世
13	伊勢山中学校遺跡	弥生～中世
14	古沢町遺跡	縄文～奈良
15	尾張元興寺跡	奈良～中世
16	東古渡町遺跡	弥生～中世
17	沢観音堂貝塚	？
18	高蔵遺跡	弥生～近世
19	玉ノ井遺跡	弥生～中世
20	断夫山古墳	古墳（前方後円墳）
21	森後町遺跡	弥生～中世
22	熱田神宮内遺跡	弥生～中世

第１表　遺跡一覧（番号は左図に対応）



第4図　過去の調査地点（S＝1/3000）

図上(北)：正木町遺跡、下(南)：伊勢山中学校遺跡
アミフセは低地部をあらわす

調査年	調査地・調査面積	調査者	主な遺構	主な遺物	現状	文献	図
1951	正木一丁目3	北村斌夫	貝層、混貝土層	弥生土器、古墳時代須恵器（初期須恵器含む）・土師器、滑石製剣形模造品など	－	－	1
1952	正木一丁目3	南山大学	貝層	弥生土器、古墳時代須恵器・土師器、滑石製鈴形模造品など	個人住宅	稲垣晋也 1957	2
1969	正木一丁目4	伊藤禎樹	混土貝層、古墳時代竪穴住居址、カマド状遺構	弥生土器、古墳時代須恵器（初期須恵器含む）・土師器、古代須恵器・土師器、山茶碗	中央児童相談所	伊藤禎樹 1969	3
1982	正木一丁目17 約50m²	市教委（試掘）	弥生～古代の遺物包含層（保存）	－	市立小プール	市教委 1983	4
1985	山王通 約900m²	市教委（第1次）	古代竪穴住居址・貝層、中世井戸、近世石垣護岸の溝	古墳時代／古代須恵器・土師器・灰釉陶器・陶馬、山茶碗、近世陶磁器	名古屋高速橋脚部	市教委 1986	5
1987	正木一丁目4 約180m²	市教委（第2次）	古墳時代／古代竪穴住居址、中世溝、地震による地割れ痕跡	古墳時代／古代須恵器・土師器・灰釉陶器・陶錘・陶製紡錘車、山茶碗、中国銭	電力洞道	市教委 1988	6
1988	正木一丁目4 約625m²	市教委（第3次）	古墳時代／古代竪穴住居址、中世溝、地震による地割れ痕跡	古墳時代／古代須恵器・土師器・灰釉陶器、山茶碗	変電所	市教委 1989	7
1991	正木一丁目14 約350m²	市教委（第4次）	古墳時代竪穴住居址、中世溝	古墳時代須恵器（初期須恵器含む）・土師器（移動型カマド含む）、山茶碗	高層マンション	市教委	8
1995	正木一丁目14	南山大学（市委託）	古代の井戸状遺構、中世溝	古墳時代／古代須恵器（初期須恵器含む）・土師器、山茶碗	高層マンション	－	9
1995	正木二丁目3 約750m²	市教委（第5次）	弥生時代（中期後半）方形周溝墓、古墳または古代掘立柱建物、古代竪穴住居址（カマド状遺構あり）	弥生土器（高蔵式）、古墳時代／古代須恵器・土師器、山茶碗	高層マンション	市教委 1996	10
1995	正木一丁目16 約140m²	市教委（第6次）	古墳時代竪穴住居址、中世溝	古墳時代須恵器（初期須恵器含む）・土師器・滑石製臼玉、近世陶磁器	個人住宅	市教委 1996	11
1997	正木二丁目8 約80m²	市教委（第7次）	弥生時代～中世遺物包含層、時期不明の土坑・ピット	古墳時代／古代須恵器（初期須恵器含む）・土師器・土錘、中世陶器	倉庫	本報告	12
1997	正木二丁目11 約80m²	市教委（第8次）	中世溝、防空壕	古墳時代須恵器・土師器、古代須恵器、近世～近代陶磁器	個人住宅	本報告	13
1997	正木二丁目12 約100m²	市教委（第9次）	古墳時代／古代土坑・ピット	縄文土器（中期末）、古墳時代／古代須恵器・土師器	公園	本報告	14

第2表　正木町遺跡調査年表　（番号は第4図対応）

調査年	調査地・調査面積	調査者	主な遺構	主な遺物	現状	文献	図
1983	正木三丁目2（伊勢山中学校地内）約67m²	市教委（第1次）	古墳時代竪穴住居址、溝状遺構、掘立柱柱穴	縄文土器片、古墳時代須恵器・土師器、平安時代灰釉陶器、山茶碗、中国陶磁	市立中学校施設	市教委 1984	A
1984	正木三丁目2（伊勢山中学校地内）約110m²	市教委（第2次）	古墳時代竪穴住居址、中世柱穴、土坑	縄文土器片、弥生土器片、古墳時代須恵器・土師器、土錘・陶錘、紡錘車、管玉	市立中学校校舎	市教委 1985	B
1987	正木三丁目2 約165m²	市教委（第3次）	古墳時代および平安時代竪穴住居址、柱穴、土坑	弥生土器片、古墳時代須恵器・土師器・鉄斧、平安時代須恵器・土師器・灰釉陶器、土錘・陶錘・石錘、製塩土器	宗教団体施設	市教委 1987	C
1987	正木二丁目13 約360m²	市教委（第4次）	中世大溝・井戸状遺構、近世溝	中世陶器・瓦・土錘・石塔片、近世陶器	高層マンション	市教委 1989	D
1993	正木三丁目4 約1500m²	市教委（第5次）	弥生時代（中期後半）竪穴住居址、古墳時代竪穴住居址、溝、掘立柱建物跡	弥生土器（高蔵式）、古墳時代須恵器・土師器・勾玉・鉄鏃、中世陶器	市営住宅	市教委 1996	E
1996	正木三丁目4 約1300m²	市教委（第6次）	古墳時代／奈良～平安時代竪穴住居址、中世溝・土坑・井戸	古墳時代／奈良～平安時代須恵器・土師器、中世陶器・陶製瓦・馬骨など	市営住宅	市教委 1997	F

第3表　伊勢山中学校遺跡調査年表　（番号は第4図対応）

註1）伊勢山中学校遺跡第5次調査SB25の床面直上から高蔵式期の壺・甕・高杯などが出土している。

註2）市教委　1996　『正木町遺跡－第5次調査の概要－』参照。

註3）また記載はしていないが、1997（平成9）年に第7次調査が実施された。

第II章　第７次調査の概要

１．調査の経過

今回の調査は、有限会社三幸電化工業所の倉庫建設に伴うものである。調査地点を含む敷地は以前市の保留地であった関係で1987（昭和61）年に試掘調査が行われている。その際かなり良好な包含層が確認されていた為、文化財課（現・文化財保護室）の調整により発掘調査を実施することとなり、倉庫が建設される敷地内南側約80㎡を対象とした。調査地点は遺跡推定範囲の最南端に位置し、伊勢山中学校遺跡との境に当たる。過去６次にわたる調査は特に遺跡範囲の北・西側に集中しており、南側を発掘するのは初めてである。調査区は変形の台形で、排土を積み置くために、東西で２分し発掘にあたった。

《日記抄》

４月３日　事業者・文化財保護室・調査担当の各代表による現地打ち合せ。
７日　準備工（事務所・フェンスの設置、器材搬入）。雨天の為測量などは延期。
８日　西半区表土除去工開始、基準点・水準点測量実施。
９日　表土除去および包含層掘削。層位やその厚さは試掘調査の報告のとおりと確認。
10日　包含層掘削。併行して遺構検出を行おうとしたが、地山上面は鉄分が沈着しており困難。
11日　遺構検出および掘削、平板測量、西半区写真撮影。地山上面を除去。遺構数は極めて少ない。
14日　西半区レベリングの後、東半区表土除去開始。
15日　包含層掘削、部分的に遺構検出作業へ。
16日　遺構検出、その後図化作業および平板測量・レベリング、東半区写真撮影。遺構はなし。
17日　後片付工（事務所・フェンスの撤去、器材搬出）。埋戻工不要とのこと、積み置きした土砂が崩れないよう処置。発掘作業終了。

写真１　西半区全景（北から）

写真２　東半区全景（西から）

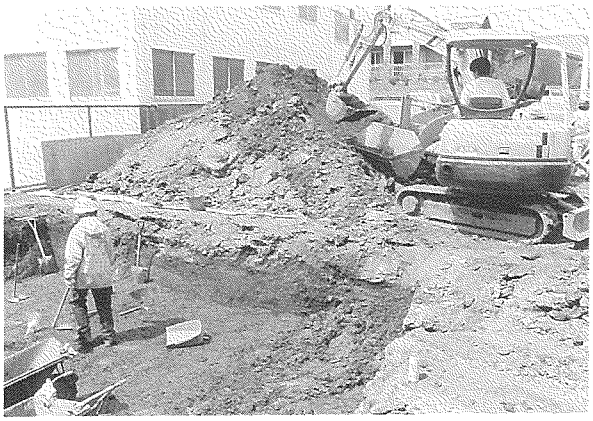
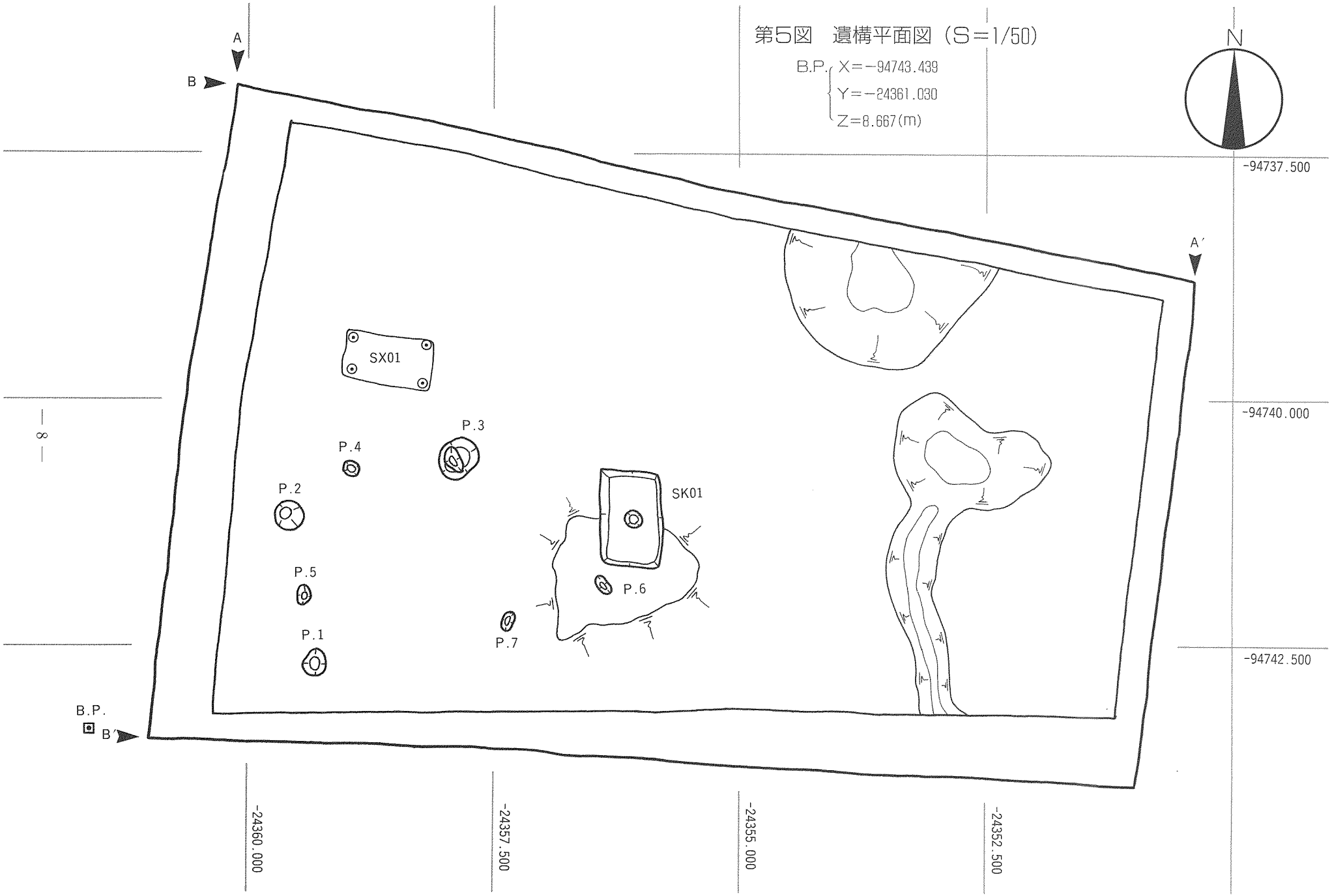


写真３　調査風景

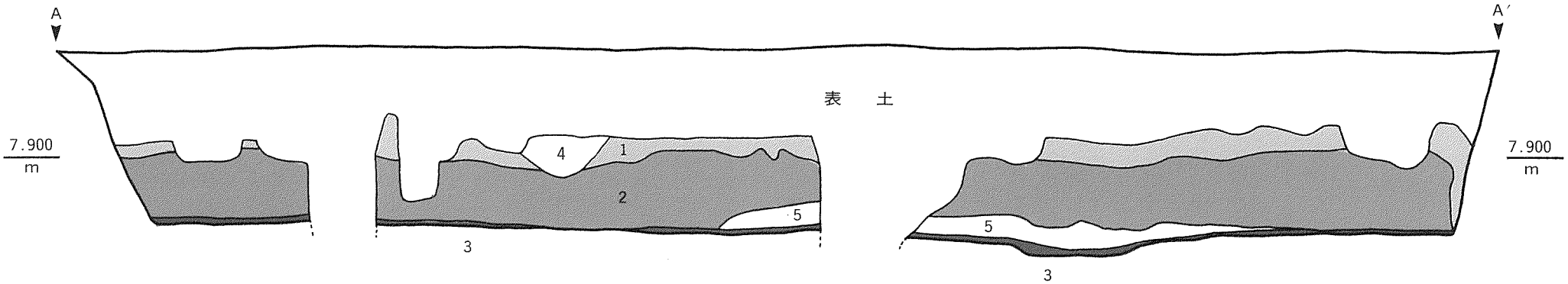
写真４　調査風景



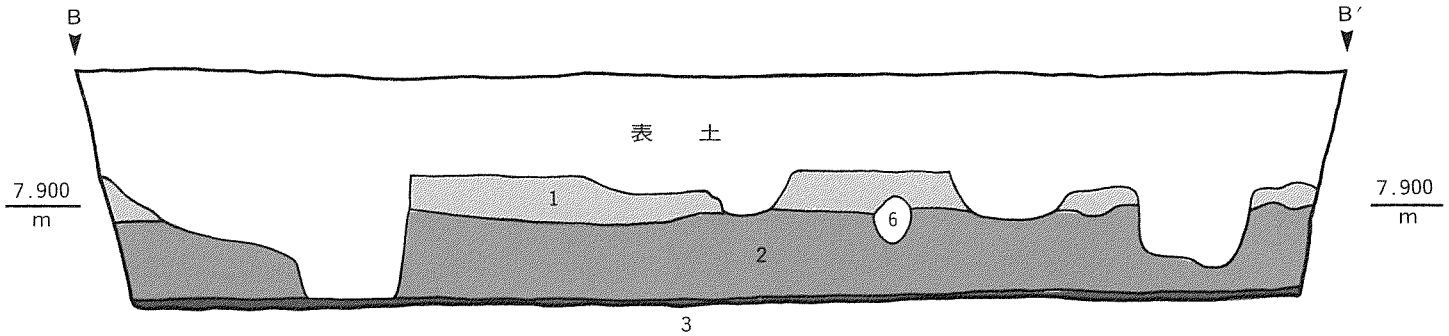
第5図　遺構平面図（S＝1/50）

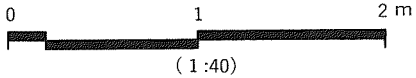
B.P. X＝－94743.439
Y＝－24361.030
Z＝8.667(m)

調査区北壁土層断面図



調査区西壁土層断面図





第6図　基本土層断面図

番号	土　層	粘性	しまり	注　記	遺物の時期
1 (▨)	灰褐色砂質土	なし	弱い	均質で混入物は少ない。包含層上層。	近世以降
2 (▩)	暗褐色土＋明褐色地山ブロック	あり	強い	地山ブロックが上位から下位まで均質に混じる。遺物包含層。	中世以前
3 (■)	赤褐色砂シルト	なし	強い	地山上面に鉄分が沈着したもの。調査区全体に広がる。	
4	灰暗褐色土	なし	なし	1に似るが全体にススが入る。	近代以降
5	明褐色地山ブロック＋褐色土	あり	強い	2に混入している地山ブロック土が主体。	古代以前
6	黒灰褐色土	なし	あり	砂っぽく、鉄分沈着している。	

第4表　土層観察表

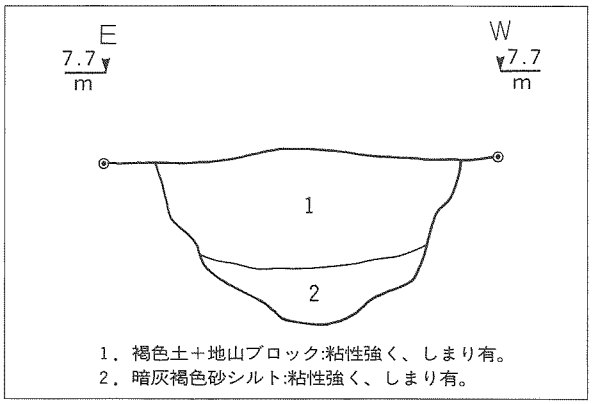
2．土層

基本層位は、表土から灰褐色砂質土層(1)、暗褐色土＋明褐色地山ブロック層(2)、赤褐色砂シルト層(3)と重なり、黄灰褐色の基盤層(地山)へと続く。全体にかなり厚く堆積しており、地表面から地山面まで約115cmを測った（第6図)。

(1)は近世の包含層、(2)は中世以前の遺物を含む包含層である。後者は「良好な包含層が残存する」と試掘調査で報告されている。約50cm前後という厚い堆積状況にもかかわらず、非常に均質で、混入している地山ブロックや遺物が集中している箇所は見られなかった。(3)は地山直上で調査区全体に広がり、鉄分を多く含み、非常に硬い。また、地山そのものにかなり凹凸がみられ[1]、この様な部分や下り気味の東側には、(2)と(3)の間に明褐色地山ブロックが主体となっている褐色土層(5)が確認されている。

3．遺構と遺物

今回検出できた遺構は、土坑(SK)1基・小穴(Pit)7基・近代遺構(SX)2基にすぎない（第5表)。SXは包含層中にて、SK・Pitは地山面で検出した。遺構は調査区の西南部分に集中しており、東側は地山自体に凹凸が目立った。SX以外で遺物を伴ったのはPit 6のみである。だが、それも土師質の小破片が1片出土しているのみである。SK・Pitはいずれも地山面からの掘りこみは深かった。



第7図　SK01断面図（S=1/15)

写真5　調査区西壁

写真6　調査区北壁（西半区部分）

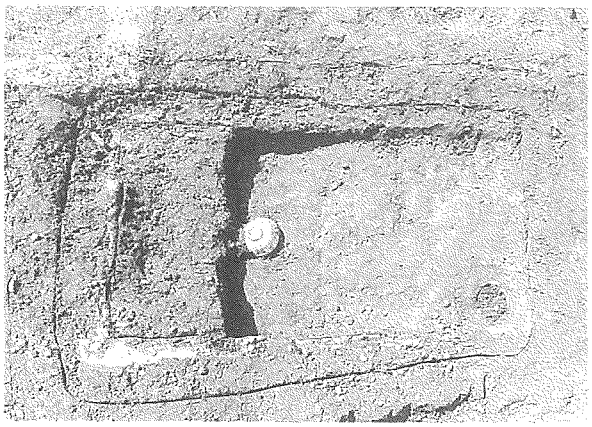


写真7　SX01（北から）

写真8　SK01（東から）

遺物はコンテナケースにして１箱強出土した。遺構に伴うものはごくわずかで、包含層中から出土した破片資料が大半を占める(第６表)。そのため今回の遺物については、一括性を望めない。

近世の包含層である灰褐色砂質土層からは、丸碗（第９図）が出土している他に、陶器の小破片が数点検出できた程度である。

その下層である暗褐色土＋地山ブロック層からは弥生後期から中世までの遺物が出土している（第10図)。破片資料のみで完形資料は見当たらない。器種・器形が判断できるものもごく僅かである。この土層はかなり厚く堆積しているが、層内の上下に遺物の時間差は関係していない。ある地点で集中して出土する状況も認められない。出土した遺物は約370破片を数えるが、これらを所属すると思われる時期別に分けてみると、弥生時代：約13%、古墳時代：約41%、奈良・平安時代：約18%、中世：約10%となった[2]。

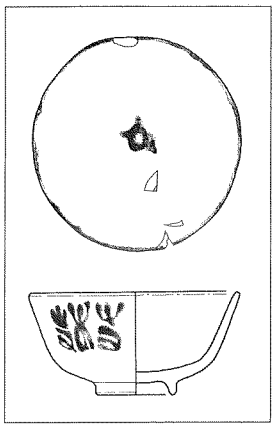
弥生時代の遺物は第10図１～３以外には高杯の脚部と思われる破片が２・３点見受けられたが、多くは胴部破片である。中には赤彩の痕跡が認められる小破片もあった。古墳時代の遺物は数量的に目立つが、なかでも目をひくのが須恵器（第10図４・８～16／以下数字は図中番号を指す）である。器種・器形が判断できる例も他の時期に比べ多い。全体的に焼成は良好だが、やや軟質なものもみられる（４・11・12)。４は縦方向のタタキが施されており、胴部下方はヘラで軽く削られているようである。鉢としたが類例が見当たらない。同様に縦方向のタタキ目を持つ破片には12がある。11は初期須恵器に良くみられる縄のタタキ目を持つ。13～16は今回出土した中でも特に器壁が薄く、硬く焼き締められている。奈良・平安時代の遺物は灰釉陶器（５・６）や須恵器（７）の破片が多いが、器形がわかる資料は少ない。中世の遺物は山茶碗と思われる胴部破片が多いが、少数ながら古瀬戸・常滑などの陶器片が出土している。17は古瀬戸の破片で全体に灰釉が掛かっているが、内面に緑色の釉溜まりがある。皿類などの器高が低めの器種と思われる。18は鉄釉で、古瀬戸後期様式のものと考えられる。この他、時期が特定できない瓦などの破片も数点出土している。８の土錘も具体的な所属時期が判断できない。土師質で両端が欠損しており、側面の一部が摩耗して直線的になっている。表面はナデが施されているが、部分的に指圧痕が残っている。正木町遺跡での土錘の報告例は第４次調査での１点のみだが、伊勢山中学校遺跡では古墳時代から中世にかけて数十点出土している[3]。

遺構名	埋　土	出土遺物	備　考
ＳＫ01	褐色土＋地山ブロック	—	方形。中心に小穴。
Pit 1	暗褐色土＋地山ブロック	—	
2	灰暗褐色砂質＋地山ブロック	—	
3	褐色土＋地山ブロック	—	鉄分が表面に沈着。
4	暗褐色土＋地山ブロック	—	
5	褐色砂質土	—	
6	暗褐色土＋地山ブロック	土師質の小片	
7	暗褐色土＋地山ブロック	—	
ＳＸ01	黒灰色砂質土	磁器茶碗	包含層中検出。
ＳＸ02	黒灰色砂質土	瓦片、焼夷弾？	包含層中検出。

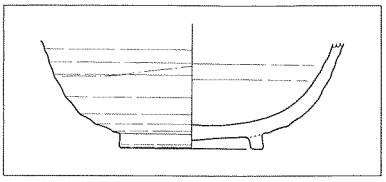
第５表　７次調査検出遺構一覧

図番号	出土層位	種別	器種	口径	器高	底/台径	備考
8	SX01	磁器	端反碗	8.15	4.05	2.95	近代以降
9	包含層上層	瀬戸美濃系	丸碗	—	—	5.5	灰釉、付け高台
10-1	包含層下層	弥生土器	壺(口縁部)	(22.5)	—	—	
2	〃	弥生土器	高杯(脚部)	—	—	—	内部にしぼり痕明瞭
3	〃	弥生土器	高杯(脚部)	—	—	—	外面ヘラミガキ
4	〃	須恵器	鉢？	(18.8)	—	—	体部外面縦方向タタキ、底部付近ヘラケズリ
5	〃	灰釉陶器	碗(底部)	—	—	(6.2)	回転糸切りのあとナデ、付け高台
6	〃	灰釉陶器	碗(底部)	—	—	(6.4)	回転糸切り痕、付け高台
7	〃	須恵器	杯蓋	—	—	—	
8	〃	土製品	土錘	—	—	—	直径(3.7)cm、重さ(62.5)g
9	〃	須恵器	広口壺(口縁)	—	—	—	
10	〃	須恵器	鉢？	—	—	—	
11	〃	須恵器		—	—	—	縄目のタタキ痕
12	〃	須恵器	壺(肩部)	—	—	—	縦方向タタキ→横方向タタキ
13	〃	須恵器	杯身	—	—	—	高杯の杯身部分の可能性有り
14	〃	須恵器	杯身	—	—	—	
15	〃	須恵器	杯身	—	—	—	
16	〃	須恵器	杯蓋	—	—	—	
17	〃	古瀬戸	鉢	—	—	—	錆釉
18	〃	古瀬戸		—	—	—	内面に釉のたまり、深皿系の屈曲部か？

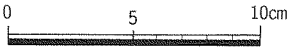
第６表　７次調査遺物観察表（第8～10図対応）



第8図　SX01出土遺物



第9図　包含層上層出土遺物



(1:3)
(第8・9図)

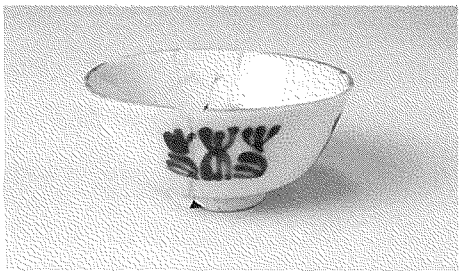


写真9　SX01出土遺物

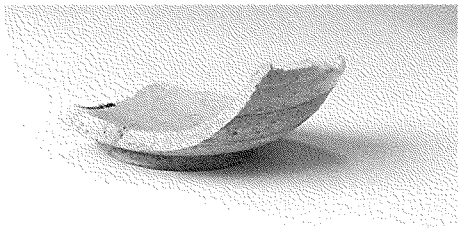
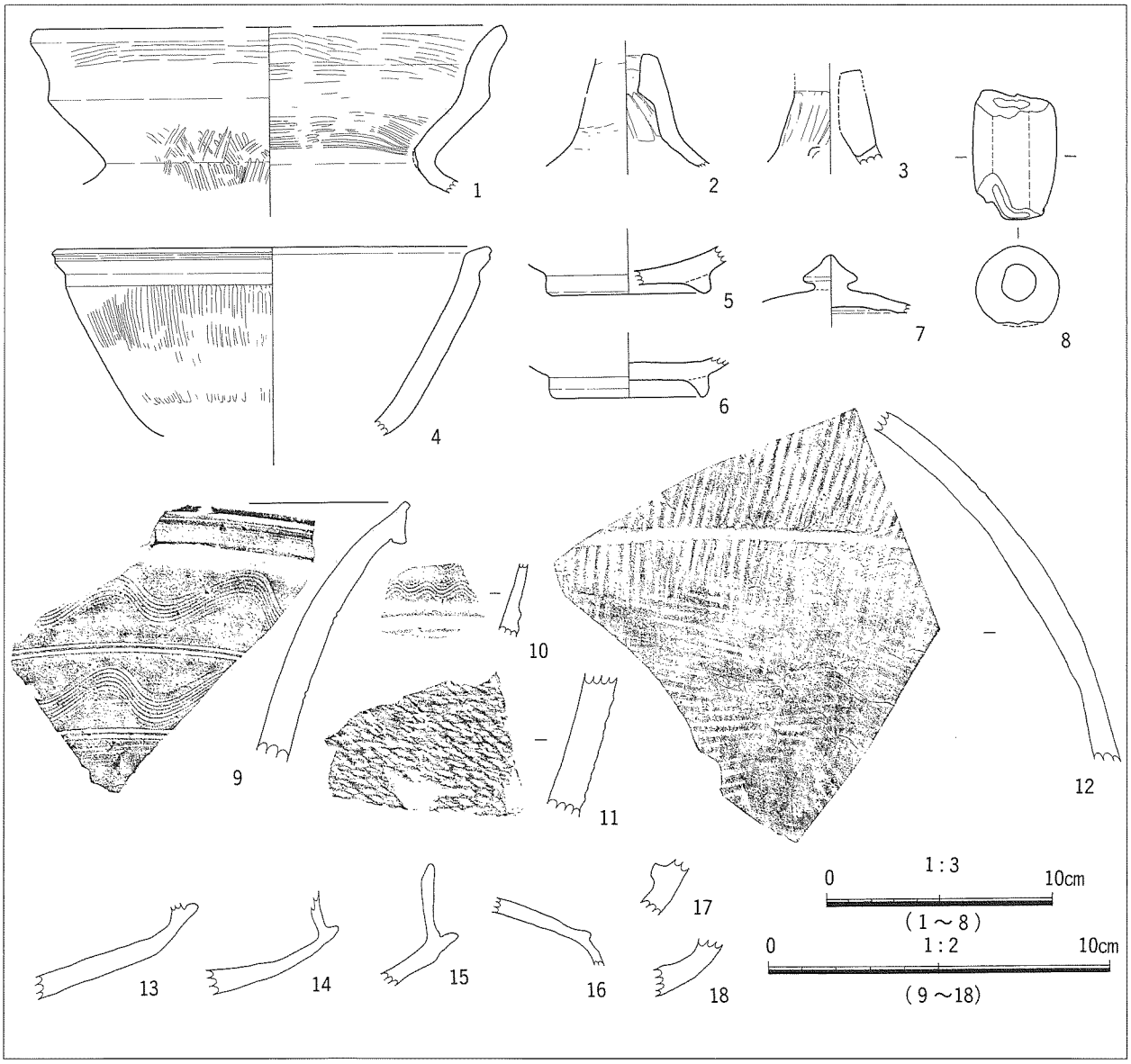
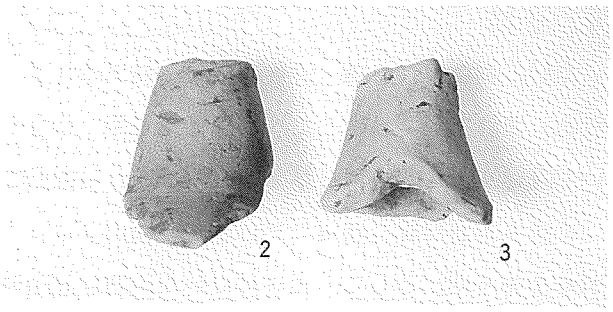
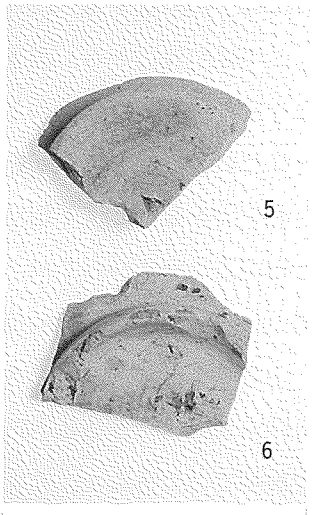


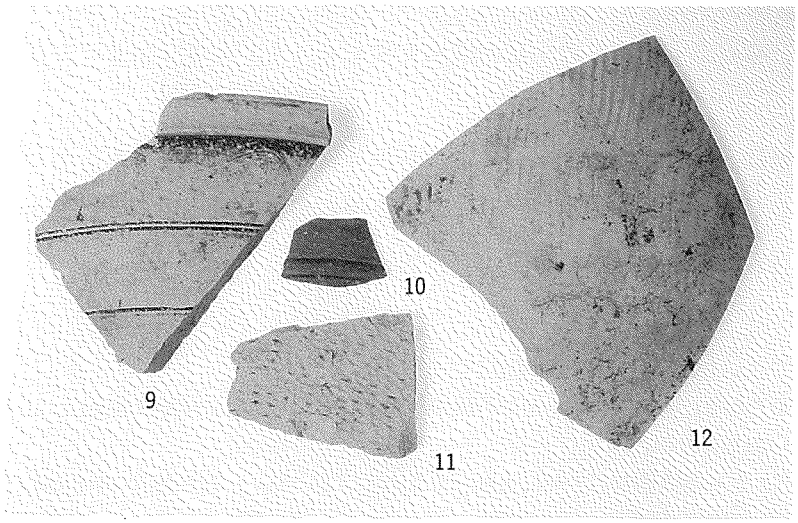
写真10　包含層上層出土遺物

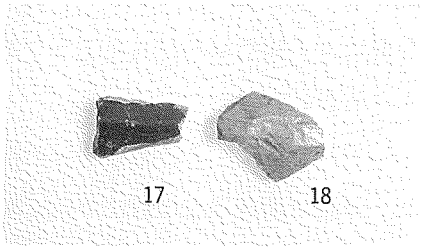


第10図　包含層下層出土遺物

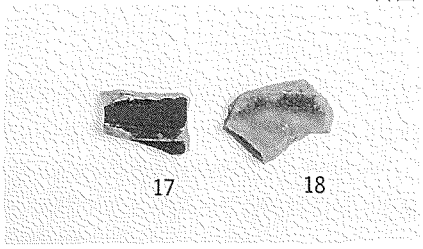








外面



内面

写真11　包含層下層出土遺物（番号は第10図対応）

4．小結

今回の調査では遺構・遺物があまり検出されず、正木町遺跡の過去の調査例とは異なる様相を見せた。特に、非常に厚く堆積した均質な弥生後期～中世の包含層（以下、包含層）は、これまで正木町遺跡において確認されておらず、第７次調査の最も特徴的な成果といえる。

この包含層は厚く堆積しているが、地山ブロックの混入の度合いが均一であり、自然堆積の痕跡は確認できなかった。そして、含まれていた遺物は層全体に時期差なく散在していた。また、本来地山ブロックと同一の土が形成していただろう熱田層上部[4]が、東側の地山がへこんだ部分を埋めるかのように少量残存していたのみであった。この様な状況から、調査地点では中世に熱田層下部の砂層上面のレベルまで削平され、その後短期間で土を盛られたと考えられる。この際、掘り出された熱田層上部とそれまでに堆積していた暗褐色土が使用された結果、均質な土層を形成したのではないかと思われる。検出した遺構数が少ないのは、硬い砂層の上面を突き抜けて深く掘削された遺構しか残らなかったからだろう。

しかし、この状況が何を物語るのかについては不明である。調査面積がごく狭く、限られているため、調査地点を含めたある程度の広い範囲に対して同様の現象がみられるのか、あるいは部分的なものなのかも判断できない。よって、この土層は中世に行われた土地整備を示すものかもしれないし、たまたま第５次調査で検出されたような巨大な溝状の落込み[5]の一部分を調査したにすぎないのかもしれないといった可能性を挙げることしか現段階ではできない。ただ面白いことに、過去この近辺でおこなわれた正木町遺跡第３・４・６次調査および伊勢山中学校遺跡第４次調査で検出された中世溝の埋土は、今回の調査の包含層によく似たものだったようである。このことは、この土層の性格を考えるうえで大きな参考になるだろうと思われる。

いずれにせよ、このあたりが中世に城館など何らかのかたちで土地利用されていたことはあきらかであり、今回の調査はこの点について新たな材料を提供する結果となった。今後の調査次数の積み重ねと共に、第７次調査の成果はより正確に捉らえられ、活かされることになるだろう。

註１）人為的な掘削の結果と判断できる形跡がないため、自然地形と考えている。

註２）おおよそ識別できた破片を基にした数値である。小破片が多いため不確かな部分もあり、誤認の可能性も高い。この数値は大方の傾向を表すものと考えていただきたい。

註３）第４次調査で古墳時代の住居址（ＳＢ01）から須恵器などと共に土錘が１点出土している。一方伊勢山中学校遺跡では１～５次調査で67点の土錘が古墳時代～中世の遺構および包含層から検出されていると報告されている。時期が明確にできない個体も多いが、古墳時代に集中するようである。

註４）この辺りでは普遍的にみられる明褐色の粘土層。基盤層とする熱田層の最上面に位置する。その下はやや粒子の粗い砂層で、ここでは熱田層下部としておく。

註５）第５次調査ＳＤ２。ただし、ＳＤ２は調査担当者によれば古代に限定されるという。ＳＤ２の底面からは、古墳時代～古代に比定される大規模な掘立柱建物群が見つかっている。

第Ⅲ章　第８次調査の概要

１．調査の経過

当調査は個人住宅建築にともない実施した事前調査である。調査地点は、闇森八幡社の北約75m、台地西縁端から約125m東に位置する。また第７次発掘調査地点は、直線距離にして約38m南東の地点である。調査対象面積は約80㎡、調査期間は平成９年９月１日から10月３日である。

調査地は、西側が公道に面し、東西方向に長い土地で、三方は隣接住宅の塀に囲まれている。掘削によって生じる排土は、積み置きしておくため南北半々に区分して、北側を前半区（N区）、南側を後半区（S区）として調査を進めた。

９月１日、前半区の表土除去を重機を用いて行い、続いて包含層掘削、遺構検出及び掘削を行った。当地は北壁に沿って土管埋設溝、中央に太平洋戦争中に構築された待避所（防空壕）があったほかは、近世以降の掘り込みは少なく包含層等の堆積は、良好な状態であった。ただし遺物はあまり含んでいなかった。中世以前の遺構は、調査区の中央を東西方向に溝状遺構を１条検出した。５日全景写真撮影、９日、10日トータルステーションによる平面図作成及び土層断面図を作成した。後半区は、９月12日表土除去を行い、翌週から包含層掘削、遺構検出及び掘削を行った。遺構は前半区で検出したのと同様な溝状遺構を検出した。24日全景写真撮影を行った。その直後の台風の影響による降雨により数日間作業が中断したが、前半区同様平面図、断面図を作成し、終了後埋め戻しを行い、器材等搬出して現地調査を終了した。

２．調査の成果

(1)　基本土層（第12図・写真13）

当調査地点は台地上であることや、調査範囲が狭いこともあり水平堆積であるので、基本的土層について調査区西壁面の観察により述べる。土層は基本的に４層に分層される。第１層は、現地表から約20cmまでの表土層で、部分的に焼土層がある。この焼土層は、太平洋戦争の空襲時のものである。第２層はその下約12cmの厚さの灰褐色砂質土、第３層はその下約10cmの厚さの黒褐色粘質土、第４層は基盤層である橙黄色シルトである。この基盤層は熱田層と呼ばれている。ただし、橙黄色シルトの基盤層が残っていたのは、調査区西端部のわずかな部分だけであり、大半はこの橙黄色シルト下位層にあたる黄灰色砂質土まで約30cm削平された状況であった。標高は、現地表面が約8.44m、橙黄色シルト面が約8.02m、黄灰

写真12　調査風景

写真13　土層（S区東壁）

色砂質土面が約7.70mを測る。

⑵　検出遺構

検出した遺構は溝状遺構２条、ピット41基、退避所１基で、検出順に番号を付した。溝状遺構は、削平されてフラットになった基盤面に人為的に黄褐色土や黒褐色土で土盛りをして溝の肩を形成したもので、２条平行して造られていた。ピットは、この溝の肩で検出されたものは、掘り上げても明瞭な形とならなかったことから、盛土中の黒色土塊そのものである可能性が高い。基盤面で検出したのはわずかで、削平を受けているため残存状況は悪い。

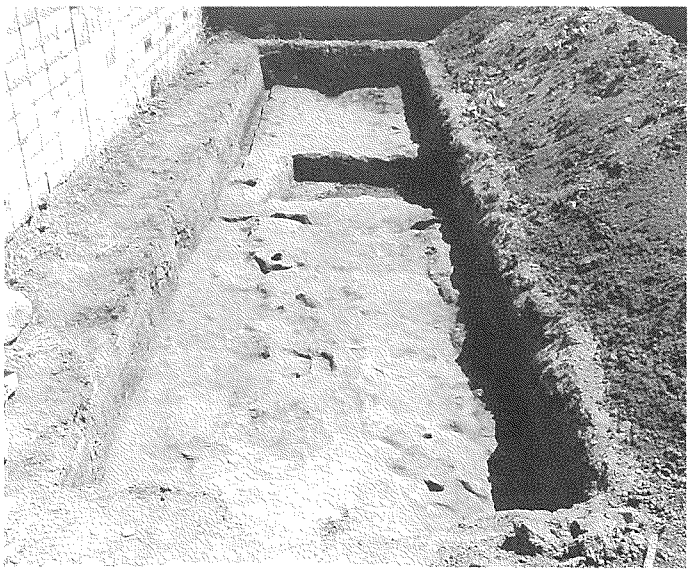


写真14　調査区全景（N区　西から）

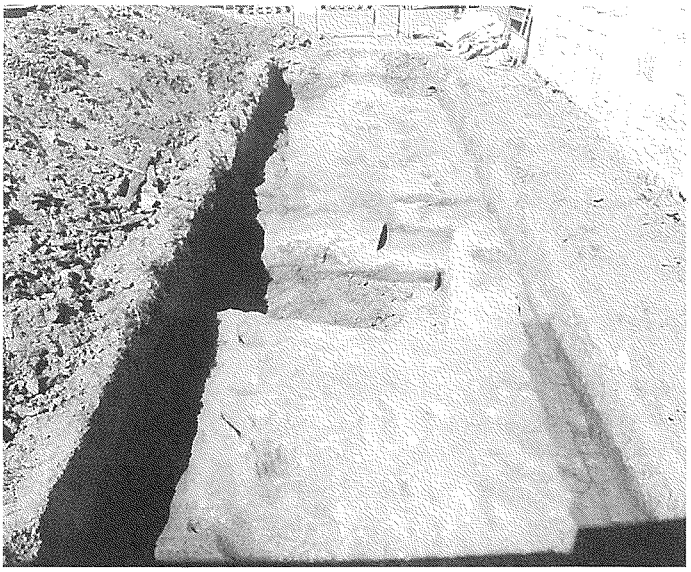


写真15　調査区全景（N区　東から）

ＳＤ01(第11図・写真14・15)

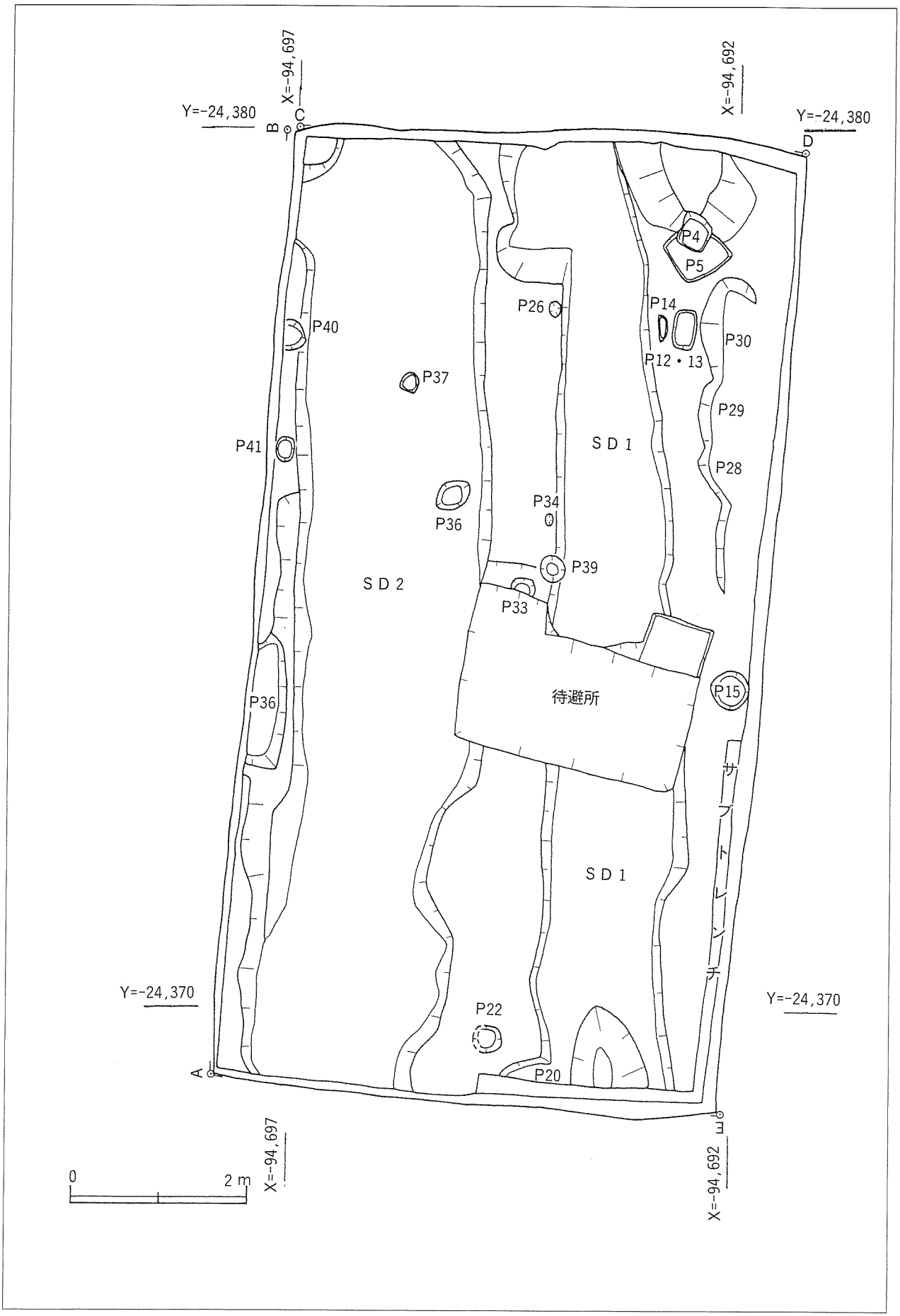
調査区の北寄りで検出された溝状遺構である。本遺構は、平坦な基盤層上に黄褐色土や橙黄色土、黒褐色土で人為的に東西方向に土を盛った部分が２条あり、その間が相対的に窪まり溝状を呈する遺構である。溝の幅は約1.0～2.0m、深さは約15～40cmである。埋土は、黒色ブロック土と褐色ブロック土が混在し、黒褐色を呈している。この黒褐色土は、盛土上位にもあり、また上位層の黒褐色土包含層と遺構埋土と明確には区分できなかったことから、溝の規模や深さは本来もう少し大きかったものであろう。溝は西端部で南に80cm程拡張しているが、調査区外まで幅が広いまま続くのかは不明である。

ＳＤ02(第11図・写真16・17)

調査区の南寄りで検出された溝状遺構である。本遺構は、ＳＤ01同様平坦な基盤層上に黄褐色土や橙黄色土、黒褐色土で人為的に東西方向に土を盛った部分が２条あり、その間が相対的に窪まり溝状を呈する遺構である。溝の幅は約2.0m、深さは30～36cm程である。埋土はやはり黒色ブロック土と褐色ブロック土が混在し、黒褐色を呈している。ＳＤ01同様に調査区西端付近で幅が広がる。

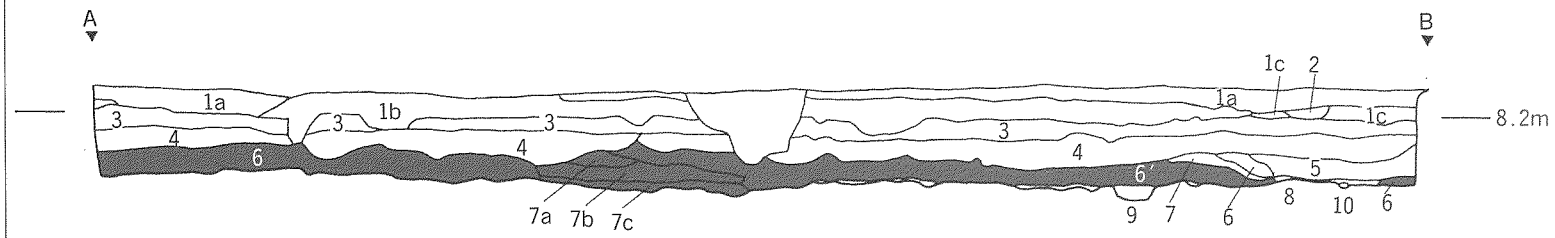
待避所(第13図・写真18～21)

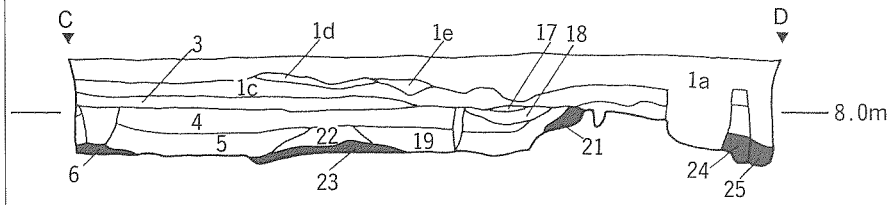
調査区中央で検出された。本遺構は、表土層から掘り込まれている。形状は、南北約2.6m、東西約1.4mの長方形を呈し、南西隅が西に折れ出入口となっている。深さは、現地表面から底面(基盤層)まで約1.4

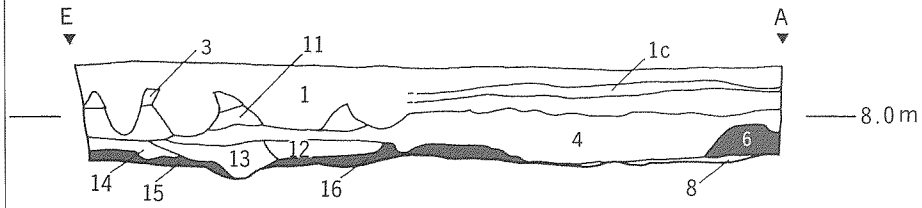


第11図　遺構平面図（S＝1/60）

第12図　土層図（S＝1/60）アミフセは盛土部分







0　2 m

土層名

1a　表土　焼土ブロック（Br.）含む（戦後）
1b　表土　茶褐色砂質土　焼土Br.土まばらに含む
1c　表土　茶褐色土　黄色砂（1d層）含む（戦前）
1d　黄灰色砂
1e　暗褐色土
1′　攪乱坑
2　黒褐色土　Br.状に入る
3　灰褐色土　均質土
4　黒褐色土　黒色シルト土Br.と褐色シルト土Br.（溝埋土上位と区別困難）
5　黒褐色土　黒褐色土Br.と褐色土Br.（溝埋土）
6　黄褐色地山Br.土　1～3cm大の黄褐色シルトBr.多く含む
7a　黒褐色土
7b　黒褐色土　黒色Br.土
7c　褐灰色砂　固く締る
8　褐灰色砂　固く締る　遺物少し含む（溝埋土）
9　黄灰色砂質土（P40埋土）
10　黄灰色土　（窪みに堆積）
11　黒褐色土
12　黒褐色土（溝埋土）
13　黒褐色土　褐色強い（溝埋土）
14　黒褐色土
15　黄色地山Br.土
16　黄灰色地山Br.土　砂質で固く締る
17　黒褐色土
18　橙褐色土
19　黒褐色土（溝埋土）
20　黒褐色土
21　黄褐色地山Br.土
22　黄褐色土と黒褐色土（盛土）
23　黄褐色土　固く締る
24　黄褐色地山Br.土
25　地山Br.土（盛土）未掘

mを測る。底面には、南北中軸線上に幅約20cm、深さ約7cmの溝が掘られていた。本遺構は、壁面や床面に使用した木材が遺存しており、当時の待避所の状況をよく残していた。また、火災を受けたようで、木材の一部は炭化していた。底面には板材が敷かれていた。床は、幅20cm、長さ約2.5mの板材を6枚使用していた。壁面には、幅18cmの板材を使用していた。3枚分が遺存していたが炭化していた。壁材を押さえるように壕の長辺には8cm角の柱材を4本ずつ計8本立てていた。床板材を取り除いたところ、壕の長軸に直交して柱材との間に6×7cm角の横木を置いていた。その横木がずれないように脇に木製楔を基盤に打ち込んでいた。

床板上には北東隅に焼けた布の塊や炭化した蓙の一部が残っていた。埋土は、下位層は黄灰色砂、上位層は焼土とともに焼けた瓦で充塡されていた。

写真16　調査区全景（S区　西から）

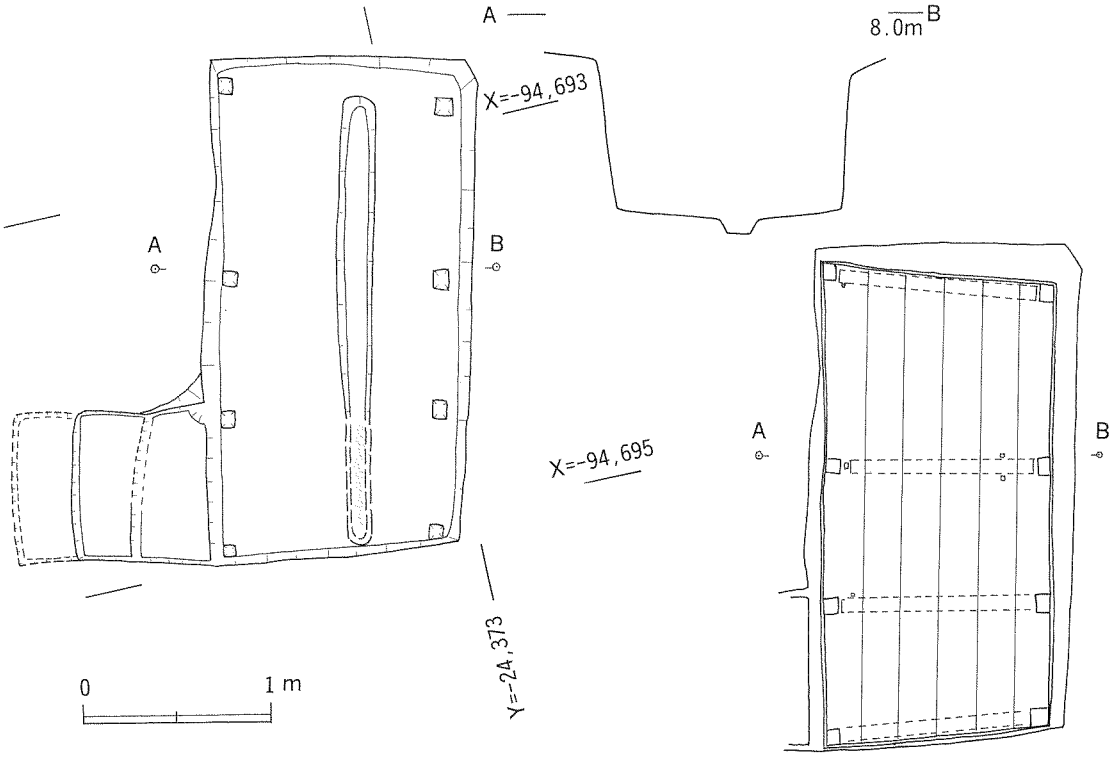
写真17　調査区全景（S区　東から）

ピット（第7表）

41基のピットを検出したが、掘削の結果、溝を形成する盛土の黒色土塊をピットと命名した可能性が高いものがある。

遺構名	検出層位	規模(cm)（　）は深さ	備　考	P29	地山Br.土	[30]×[70](5)	窪みか盛土
P 4	P 5 埋土	34×38(9)	攪乱か	P30	地山Br.土	[60]×[110](13)	窪みか盛土
P 5	黒色土	58×62(2)		P33	地山	[12]×[20](6)	瓦、石
P12	地山Br.土	20×26(7)	P13･14より新	P34	地山Br.土	9 ×12(7)	
P13・14	地山Br.土	20×26(7)10×28(6)		P36	盛土	[40]×140(4)	窪みか盛土
P15	表土	42×42(12)	甕を埋設	P37	溝底地山	18×20(9)	
P20	地山Br.土	[26]×[56](8)		P38	溝底地山	30×34(6)	
P22	地山Br.土	[20]×30(9)		P39	盛土下地山	26×30(5)	
P26	地山Br.土	14×16(7)		P40	盛土下地山	34× [20] (9)	
P28	地山Br.土	[40]×[70](5)	窪みか	P41	盛土下地山	20×28(9)	

第7表　8次調査ピット一覧表



第13図　待避所（左図／掘り方、右図／床材の復原　アミフセは推定　S＝1/40）

写真18　完掘状況（N区　東から）

写真19　完掘状況（N区　西から）

写真20　動いた床板材を取り除いた状況（西から）

写真21　床板材を取り除いた状況（北から）

(3) 出土遺物

遺物は、コンテナケース(34×54×14cm)に約3箱分である。内2箱分は古墳時代から中世までの土師器、須恵器、山茶碗等で小破片資料である。残りの1箱分は、待避所出土の瓦、布、木材片等である。

表土・包含層（第15図1～12・写真22～34）

土師器は、器形の判読できない小片が大半である。1は、高坏脚部で、脚径10.0cmを測り、橙色を呈する。N区出土。2は須恵器の甕口縁部で、内外面は褐色であるが、断面は赤褐色である。N区出土。3は土師器の甑または鉢の把手部分で、灰白色を呈する。焼成は良好であるが軟質であるため軟質土器かもしれない。N区出土。4は須恵器で、外面に縄目叩き痕が残る。内面はナデ調整を施す。淡灰色を呈する。S区出土。5は滑石製臼玉で、直径4.5mmを測る。灰白色を呈する。片面は欠ける。S区出土。6は窯道具（トチンの一種）である。平坦面に焼物の痕跡がある。直径約6.4×6.1cm、厚さ約1.1cmを測る。S区出土。7は陶器蓋で口径9.2cm、器高3.8cmを測る。上面に灰釉が施される。露胎は灰白色を呈する。内面ヘラケズリ調整、かえり部はヨコナデ調整を施す。N区出土。8は陶器筒茶碗で、口径7.0cm、器高5.3cm、高台径5.0cmを測る。内外面に灰釉が施される。18世紀後半～19世紀初頭、瀬戸産。N区出土。9は陶器植木鉢で、口径8.0cm、器高7.3cmを測る。体部下端に脚が3つ貼り付けられる。底部から口縁部にかけてつや消しの漆黒調の釉が施される。N区出土。10は肥前系磁器碗で、口径6.6cm、器高5.2cm、高台径3.0cmを測る。体部外面に呉須で渦巻き模様が描かれる。N区出土。11は陶器植木鉢で高台径18.8cmを測る。N区出土。高台内面に陰刻「玉□」がある（第14図1）。12はガラス製牛乳瓶で口径3.0cm、器高12.1cmを測る。捩式栓のため内面に螺旋がきられる。外面にエンボス文字「全乳　丹羽　養乳舎」「實用新案出願中　非賣壜　カ　加藤製」とある。明治22～32年頃。写真33は、磁器で底面に「西浦造」と手書きされる。西浦焼は、明治後期に多治見で焼かれたものである。写真23は、空襲で溶けたガラス瓶の破片である。

ピット（第15図13・写真35）

13は陶器小瓶で、口径1.8cm、器高4.1cm、底径2.3cmを測る。P34出土。

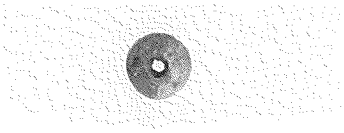
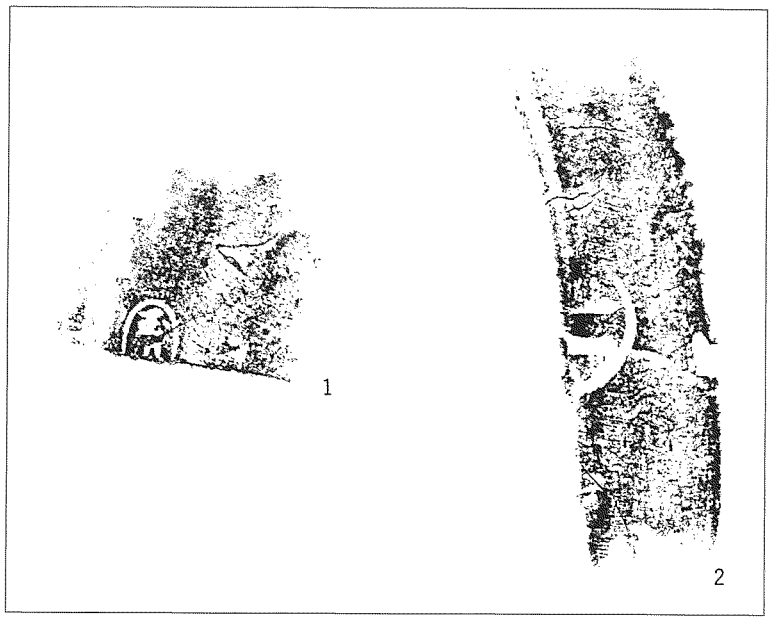
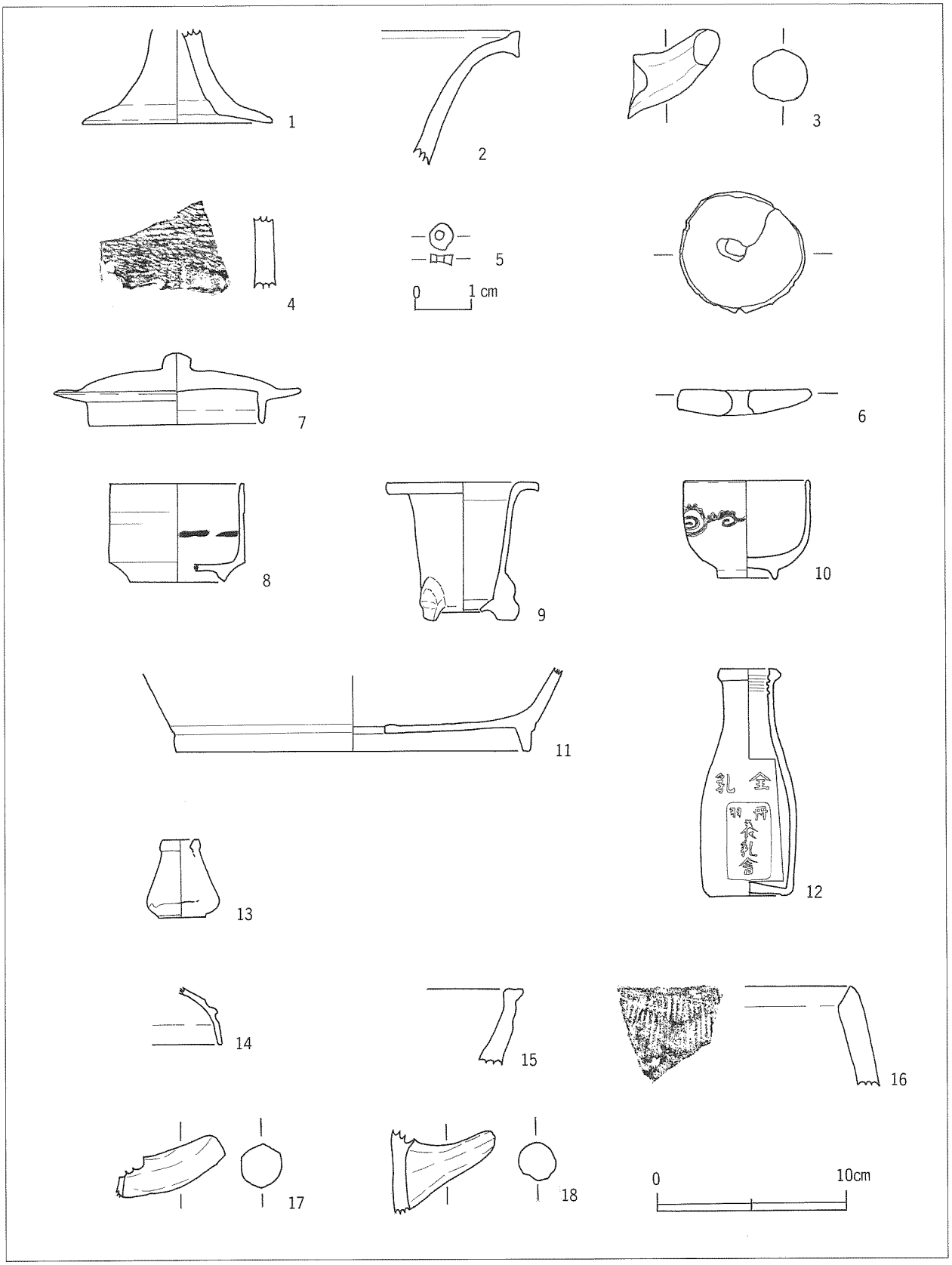


写真22　臼玉

写真23　溶けたガラス



第14図　刻印拓影（S=1/1）



第15図　遺物実測図（S＝1/3）

写真24　土師器

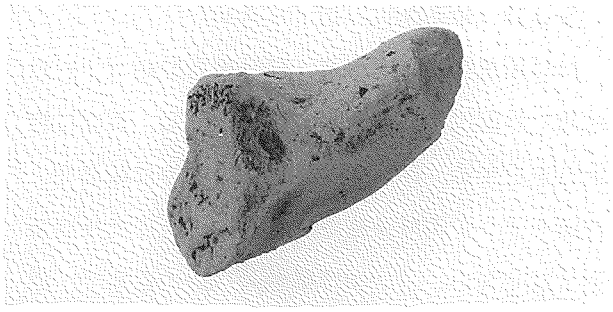


写真25　土師器(？)

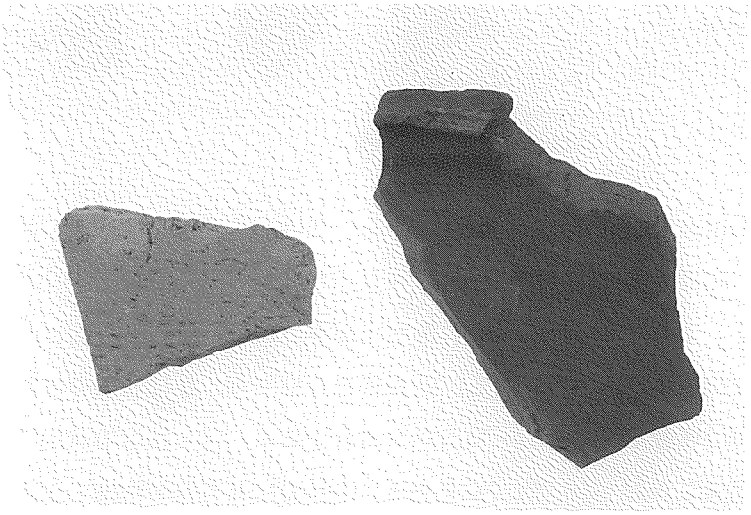


写真26　須恵器

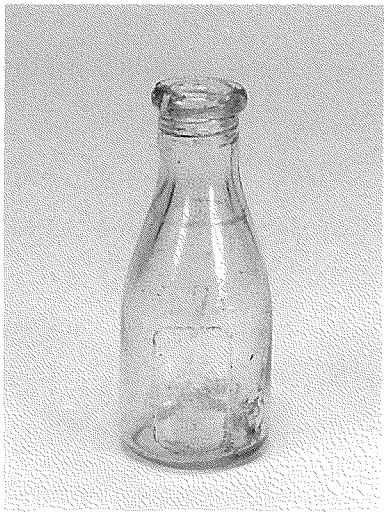


写真27　ガラス瓶

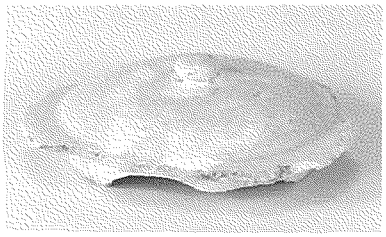


写真28　陶器

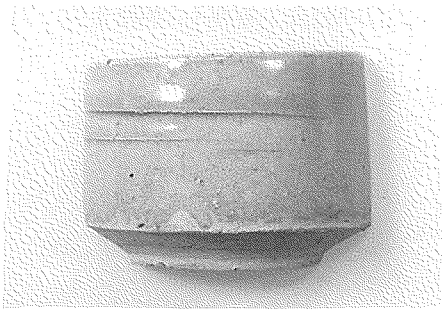


写真29　陶器

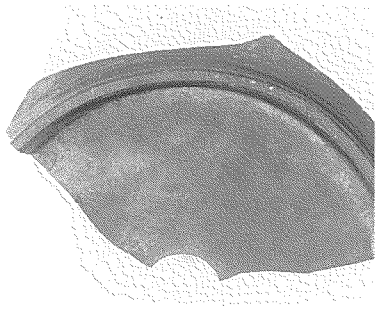


写真30　陶器

写真34　窯道具

写真31　磁器

写真32　陶器

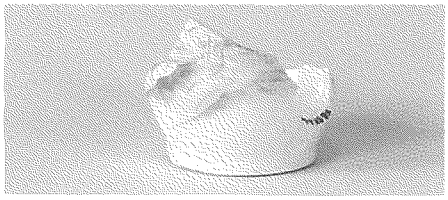


写真33　磁器

写真35　陶器

ＳＤ01（第15図14～18・写真36）

14は須恵器坏身口縁部、15は須恵器鉢（？）口縁部で外面は青味のある橙灰色、内面、断面は橙灰色を呈する。16は須恵器甑又は鉢の口縁部で、外面タテハケ調整が施される。白灰色で焼成はあまり良くない。17は須恵器甑又は鉢の把手で、灰白色を呈する。18も須恵器甑又は鉢の把手で淡灰色を呈する。写真30-６、７は中世古瀬戸陶器、写真36右下は近世陶器皿で唐津焼である。

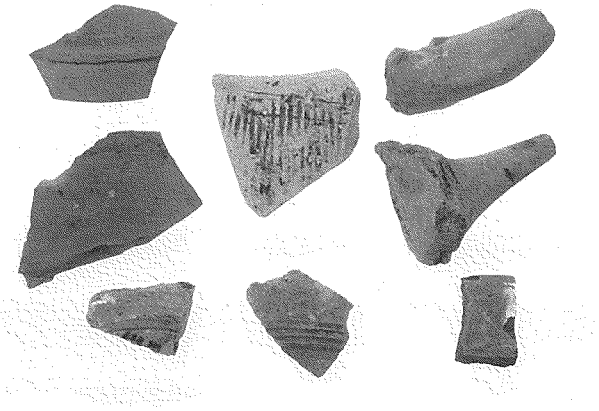


写真36　須恵器・陶器

ＳＤ02（第16図１～21・写真38～44）

１～14は須恵器である。１は無蓋高坏又は鉢の口縁部波状文が施される。２は大形甕で孔の上下に波状文が施される。体部下半はヨコナデ調整、底部近くはナデ調整が施される。３は甑又は鉢の口縁部で外面は平行タタキの後ヨコナデ調整が施される。４は坏身、５は外面に波状文が施される。外面、断面は灰色、内面はセピア色を呈する。７、８は外面に格子タタキが施される。淡青灰色を呈する。９は壺類の体部である。10は坏蓋鈕、11は長頸壺口縁部、12は坏蓋口縁部、13・14は坏身高台である。15・16は山茶碗の碗で、15は高台径6.8cm、16は口径12.7cm、器高5.6cm、高台径4.7cmを測る。内外面に長石粒の吹出しが著しい。高台に籾殻痕がつく。17は小皿で器高1.6cmを測る。18は陶器羽釜鍔のようであるが、窯道具の可能性もある。19は陶器の徳利口縁部で、大窯Ⅱ期(井上編年)。20は土錘、21は近代陶器の火消し壺蓋であろうか。橙褐色を呈する。

待避所（第16図22・写真37）

22は軒瓦である。火災を受け橙褐色を呈する。桟瓦には刻印が施される(第14図２)。他に炭化した布、蓙がある。

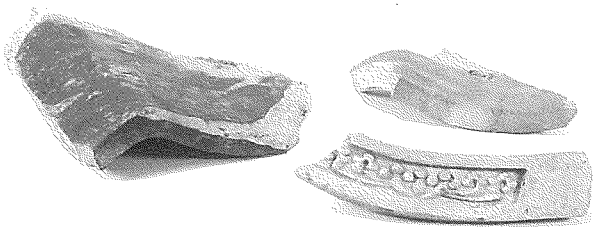
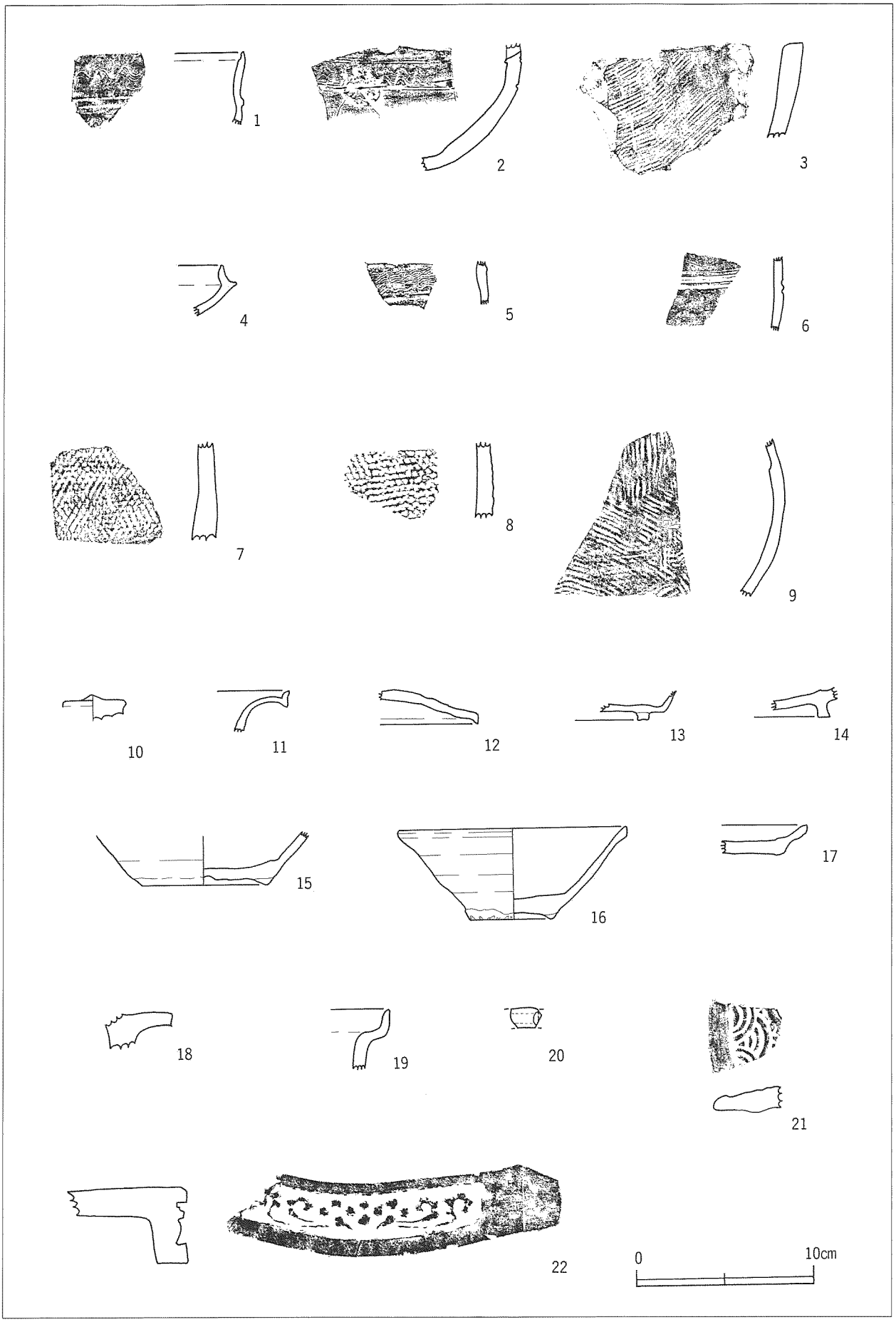


写真37　瓦



第16図　遺物実測図（S＝1/3）

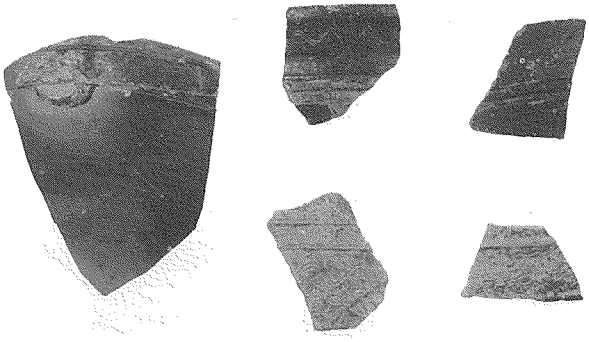


写真38　須恵器

写真39　須恵器・陶器

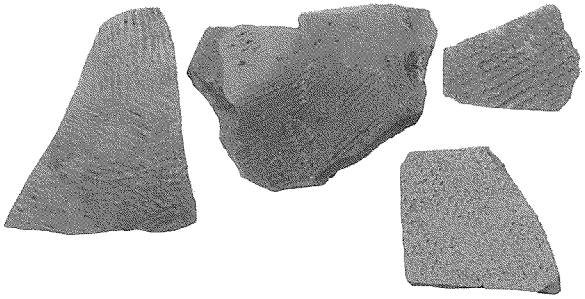


写真40　須恵器

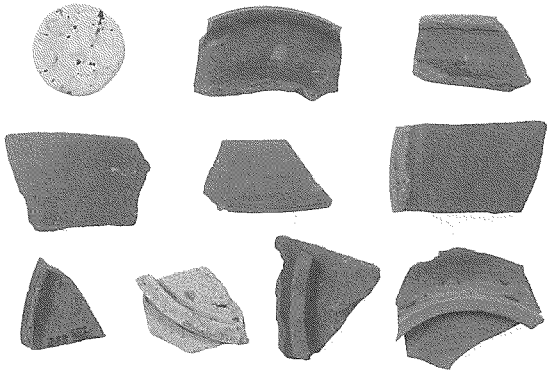


写真41　須恵器

写真42　山茶碗

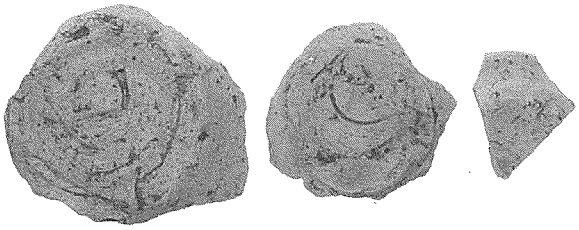


写真43　山茶碗

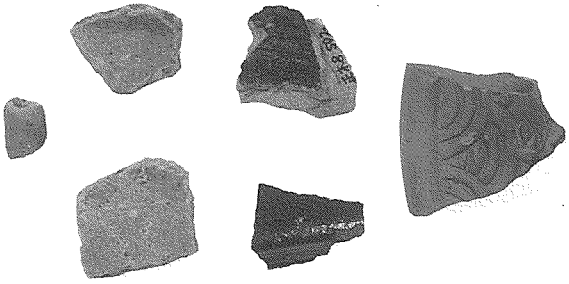


写真44　陶器

3．小　結

今回の調査で明らかになったことを３項目に分けまとめとする。

(1)　地山の削平と溝の検出

溝は、地山を削平し平坦になっているところに盛土により両肩を造り相対的に窪ませたものである。西端ではかろうじて削平を受けていない地山の高まりを検出しているので、調査区の西の方ではまた様相が異なっている可能性が高い。溝の形成された時期は、第16図に図示したように近世～近代と思われる遺物が数点出土していることから、近世以降とするべきであろうが、溝の肩を造る盛土中から出土する遺物は、中世以前の遺物であること、溝の上位に堆積した包含層から出土する遺物も中世までの遺物であることから、近世以降の遺物は、上位から掘り込まれたピット等の遺物であることも考えられ、溝の時期はひとまず中世後半～近世初頭と考えておきたい。

第７次調査地点でも、中世後半に地山面を削平していることが明らかにされており、この付近では中世後半～近世初頭に大規模な造成工事が行われているようである。

この頃、当地域では1533年に織田信秀が古渡城を築城し、1610～13年には徳川家康が名古屋城を築城し城下町を建設している。また江戸時代に書かれた『金鱗九十九野塵』には、鎮西八郎為朝の子孫、市部太郎義季が古渡村市部の庄に居住していたこと、闇森神社東方に「城戸口」「九丁堀」の地名が残り城館のあったことを示すものと記されている。今、市部庄がどの地域であるのかは明らかにされていないが、伊勢山中学校遺跡第４次発掘調査地点では、16世紀前半代に埋没した堀が検出されている。堀に囲まれていた城館は、古渡城築城以前にすでに廃城になっていたか、古渡城築城に際して破城になった可能性が考えられる。

今回の調査で明らかになった地山の削平工事や溝の構築も古渡城築城に関連しての周辺地域の開発とも考えられる。今後の課題としたい。

(2)　遺跡の消長

前項で述べたように、地山の削平を受けていたために、中世以前の遺構はわずかなピットを検出したに留った。包含層や溝の中からは、古墳時代中期から中世までの遺物が出土した。古墳時代中期の遺物としては、土師器高杯、格子タタキや縄目タタキの残る須恵器がある。滑石製臼玉もこの時期のものであろう。古代では須恵器はあるものの灰釉陶器はない。中世では、12～13世紀の山茶碗や13～14世紀の古瀬戸陶器がある。当地域にはかつては当該期の集落が営まれていたものと推定できる。近世では、城内や城下町の調査で見られるような廃棄土坑が検出されなかったため、陶磁器等もわずかであった。城下町絵図をみても本町筋から離れており、畑地や空き地であったのであろう。他に窯道具がある。この付近では、東古渡町遺跡第５次調査でも、窯道具や焼け歪のある製品が出土している。当地での窯業は、辻鉦二郎が1879年（明治12年）頃古渡夜寒の里（中区金山）において始めたとされる夜寒焼、元尾張藩士木全年輝が1893年（明治26年）頃古渡東雲町（中区金山）付近で開窯して東雲焼がある。窯場の正確な位置は、明らかになっていないが、こうした窯場からもたらされたものであろう。

(3)　待避所について

今回の調査では、太平洋戦争当時構築された待避所（防空壕）が１基検出された。待避所は、家屋の床

下、庭先、道端、公園や学校校庭など空き地、山や崖の斜面などに構築された。個々の家庭単位の小規模なものから、町内会や学校、工場など集団単位の大規模なものまでさまざまなものがある。

今回の検出された待避所は、長さ約2.4m、幅約1.2m、床面積2.88㎡、現地表面からの深さ約1.4mであった。断面の形、規模は第17図３とほぼ一致する。

発掘調査では、しばしば待避所が検出される。中区古沢町遺跡の待避所は、長さ約1.35m、幅約0.9m、床面積約1.22㎡、地山検出面からの深さ約1.0mを測る。正木町遺跡第１次調査の待避所は、長さ約6.72m、幅約1.2m、床面積約8.06㎡、地山検出面からの深さ約1.2mを測る。伊勢山中学校第６次調査の待避所は、長さ約3.0m、幅約1.0m、床面積3.0㎡、確認できる深さ約0.7mを測る。東洋紡績㈱名古屋工場内（当時愛知時計電機の軍需工場）であったことから工員用であろう。

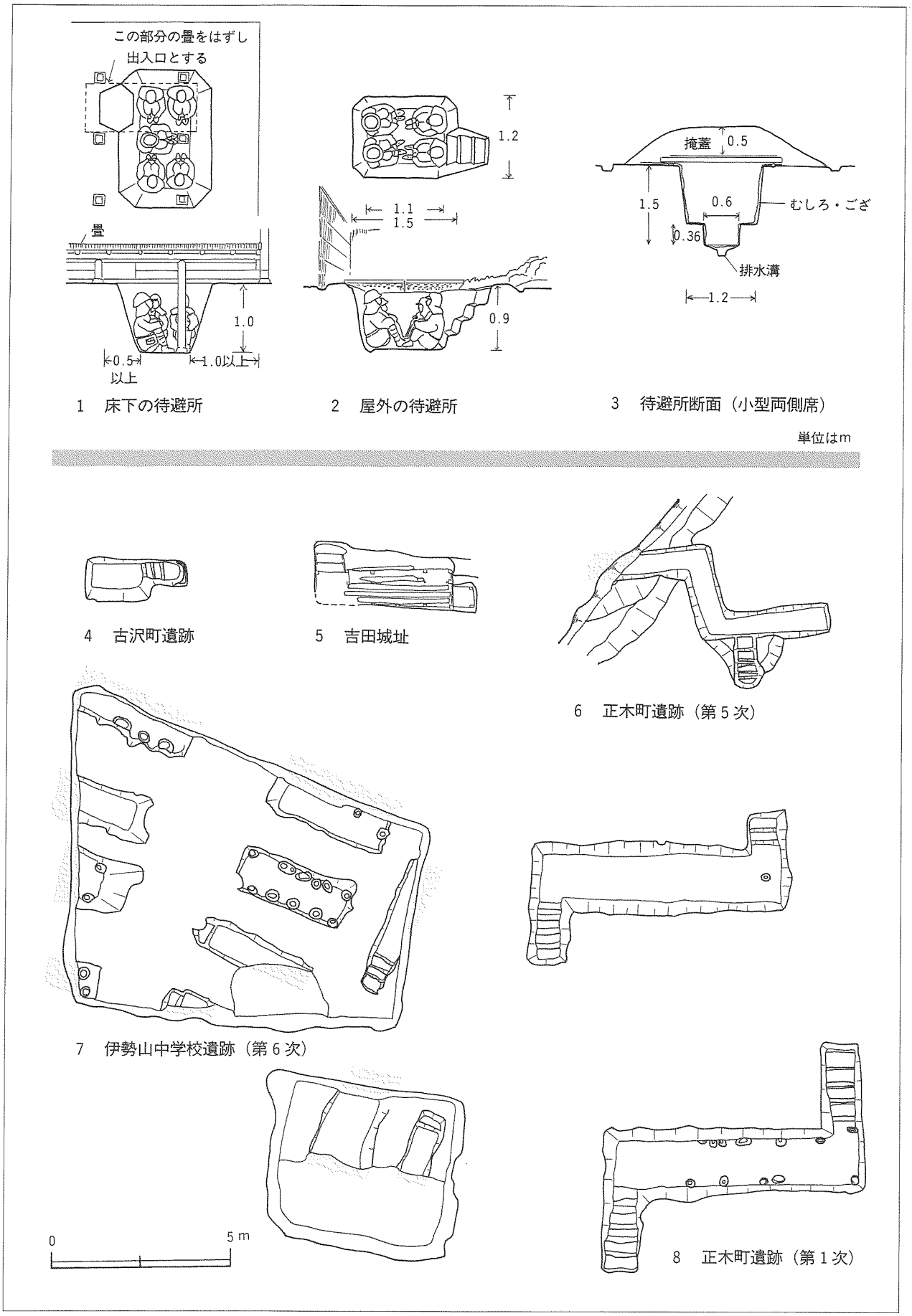
さて、待避所に収容できる人数は、何人か。『防空壕構築指導要領』(昭和15年)によれば、一人当り床面積は1.5㎡とされる。この面積では、古沢町遺跡の場合１人未満となる。国の基準はややゆったりとしたものか。古沢町遺跡では、実際に中に２人入ってもらったがまだ余裕があった（写真45)。「時局防空必携」を解説した『寫眞週報　第二百八十三號』(昭和18年）に掲載された挿絵（第17図２）から、床に座る姿勢で収容する場合の１人当り面積を算出すると、0.22㎡である。今回の待避所の場合、13人となる。豊橋市の陸軍歩兵第18聯隊本部跡地（吉田城址）で検出された待避所は、出入口の奥は爆風の影響を受けるため、ここを空けて腰掛が作られていた。このような場合で計算し直すと、有効面積は1.7m×1.2m＝2.04㎡となり、0.22で除すると９人となる。腰掛があったと想定した場合(腰掛材は検出されていない)、片側席有効長1.7mで一人当りの長さ0.45m（『防空壕構築指導要領』、『日本防空史』では0.45～0.6m）で除すると３人となる。幅1.2mは、両側席が可能となる（第17図３）ため、６人となる。同様に正木町第１次調査の待避所は、それぞれ27人、22人となる。よって、共同利用(複数世帯用)のものと推定される。ただし家財道具を持込む場合はこの限りではない。

今回検出された待避所は、内部の壁材や床材が残存していた。火災にあい、戦後板材等を再利用することなく埋められたためと思われる。板材が検出された例として、吉田城址のほか守山区小幡遺跡が知られる。

なお、当地が空襲にあい焼失したのは、昭和20年５月17日である。この空襲で正木国民学校も焼失している。

遺　跡　名	床座りの場合	腰掛席の場合	席のタイプ	床幅
正木町遺跡第８次	９人	６人	両側席	1.2m
古沢町遺跡	４人	３人	片側席	0.9m
吉田城址	－	６人	片側席	1.0m
正木町遺跡第１次	27人	22人	両側席	1.2m
伊勢山中学校遺跡第６次	13人	６人	片側席	1.0m

第8表　待避所収容人数（目安）



1　床下の待避所

2　屋外の待避所

3　待避所断面（小型両側席）

4　古沢町遺跡

5　吉田城址

6　正木町遺跡（第５次）

7　伊勢山中学校遺跡（第６次）

8　正木町遺跡（第１次）

第17図　待避所の構造と調査事例

写真45　古沢町遺跡待避所

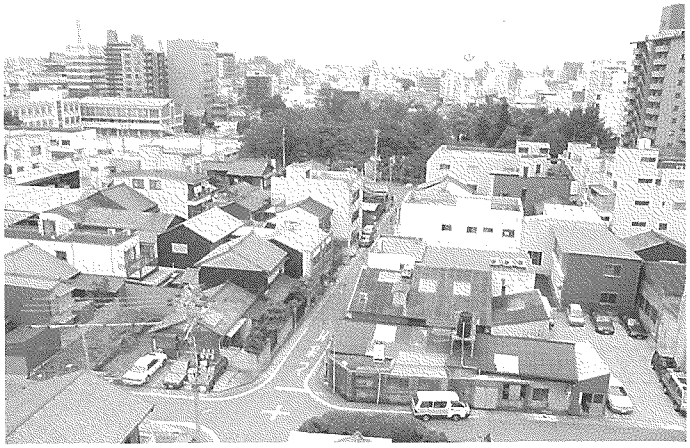


写真46　調査地遠景（左下）

図版出典

第17図（原図トレース　一部略）

1・2　『寫眞週報　第二百八十三號』1943年　情報局編輯
3　『日本防空史』1981年　原書房
4　『古沢町遺跡発掘調査概要報告書』1995年　名古屋市教育委員会
5　『吉田城址（Ⅰ）』1994年　豊橋市教育委員会
6　『正木町遺跡第５次調査の概要』1996年　名古屋市教育委員会
7　『伊勢山中学校遺跡－第６次発掘調査の概要－』1997年　名古屋市教育委員会
8　『正木町遺跡発掘調査概要報告書』1986年　名古屋市教育委員会

第Ⅳ章　第９次調査の概要

１．調査の経過

第９次発掘調査は、名古屋市中区正木二丁目に所在する正木公園の北西角入口に防火水槽を埋設する名古屋市消防局の事業に先立って実施した。平成８年度当初から事業は計画されていたが、調整の結果調査に着手したのは平成９年11月25日で、平成９年12月19日をもって現地での作業を終了した。

調査地点は遺跡範囲の南東端近くに位置している。対象面積は約100㎡と狭い範囲ではあるが、この付近の調査例は昭和57年度の試掘調査と第７次調査くらいである(第４図参照)。また本遺跡の南隣にひろがる伊勢山中学校遺跡の第４次調査が今回の地点より100m離れた位置で実施されている。

以下、調査の経過を日記抄の形式で記しておく。

11月25日　調査開始日。準備工（～28日まで)。
12月１日　表土除去。リサイクルする部材を破損しないよう除去するのに手間取る。基準点測量(業者委託)、事務所設置。
２日　表土除去終了。想像以上に攪乱がひどい。包含層の残存状況はきわめて悪く、調査区中央などで部分的に残る程度。
３日　攪乱を機械などで掘削した後、黒褐色粘質土の包含層掘削に入る。
４日　包含層掘削および遺構検出作業。ピットを中心に相応の数の遺構を検出。(～５日まで)
８日　雨のため作業中止。
９日　遺構検出作業終了。遺構掘削開始。Ｐ９より須恵器杯蓋など出土。
10日　遺構掘削。ＳＫ01より赤焼けの須恵器の小碗出土。ＳＸ01は遺構が重複している可能性が高く精査するが確認できず。
11日　遺構掘削終了。調査区壁面の清掃。
12日　調査区全体の清掃、ＳＸ01セクション・基本土層の写真撮影および作図。
15日　全景写真撮影。平板測量を開始。
16日　平板測量終了。エレベーション測量。
17日　後片付け工（～18日まで)。
19日　事務所撤去。現地作業終了。

写真47　調査前状況（南東から）

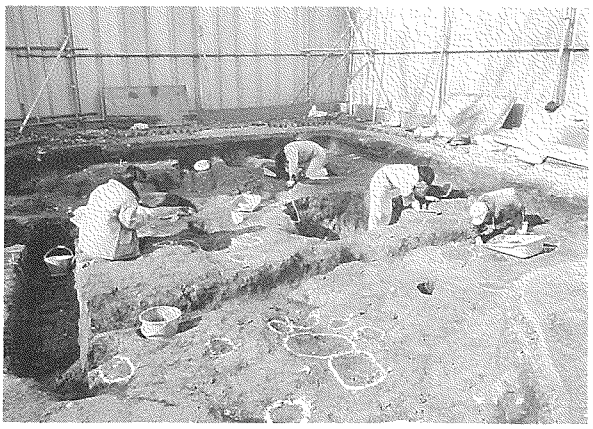


写真48　調査風景

第18図　遺構平面図

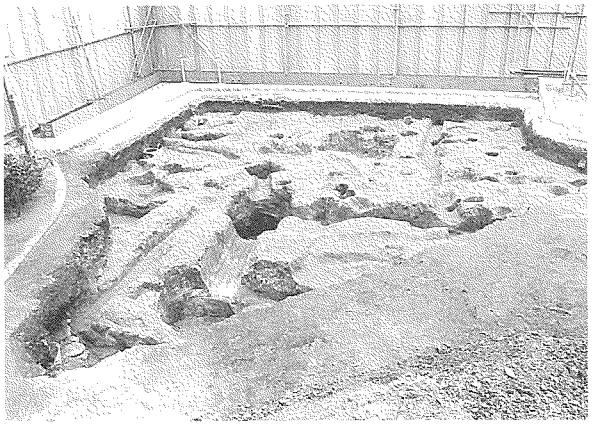


写真49　完掘状況（南から）

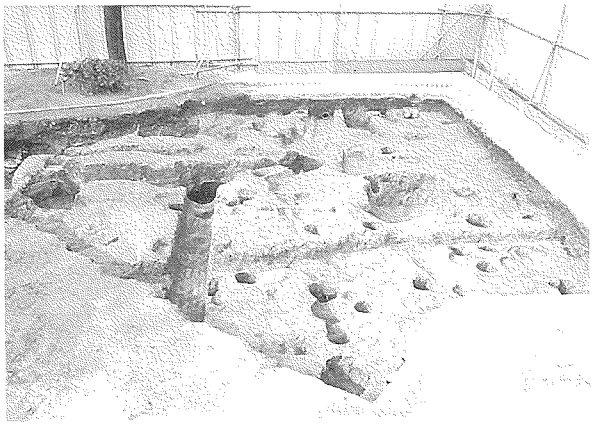


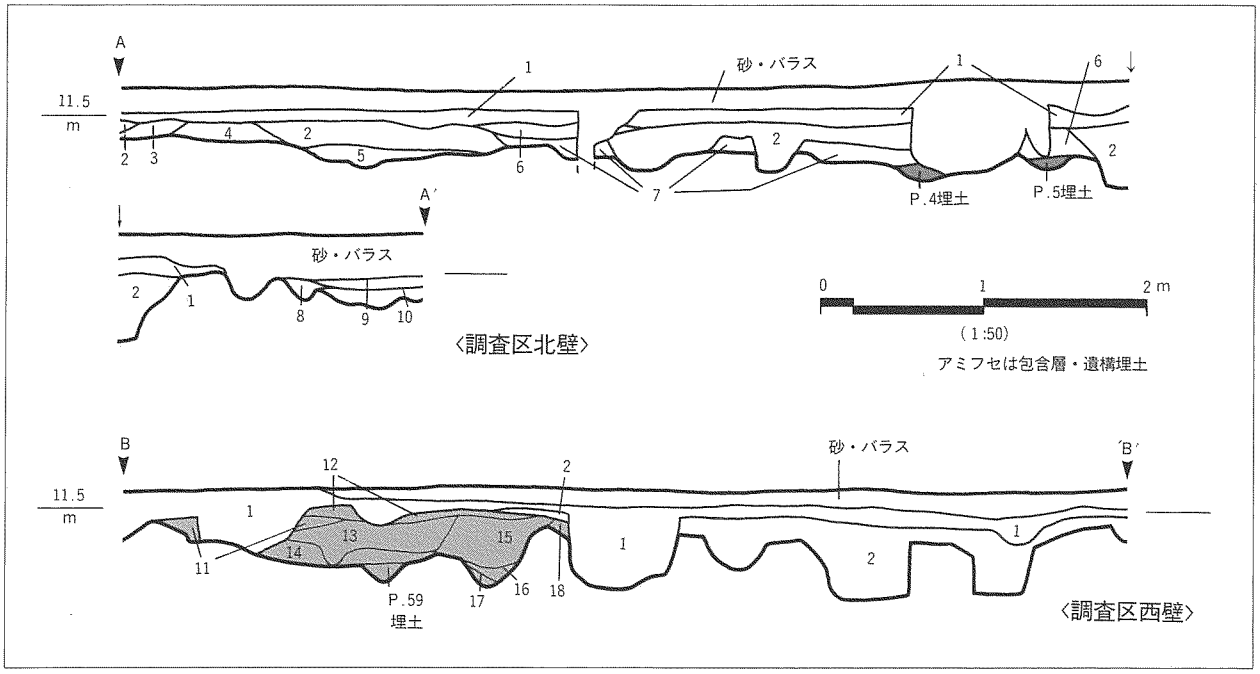
写真50　完掘状況（東から）

2．土層

現地表面（舗装ブロック等は除く）から地山面まで約50cmと、台地上としては平均的な堆積状況であったが、それを構成するほとんどが現代土層で占められていた。包含層と思われる土層は、調査区の西側から中央付近にかけて黒褐色～暗褐色粘質土がわずかに残る程度であった。壁面にこの包含層が確認できたのは西側の部分だけであったため、基本土層は調査区北・西壁で観察した（第19図・写真51）。

基本土層は地表面より現代土層１、現代土層２[1]、黒褐色～暗褐色粘質土の包含層と重なって、橙褐色の基盤層に続く。この黒褐色土から須恵器や土師器、灰釉陶器片が出土していることから、古墳時代～古代の包含層と捉らえた。これ以降の時期の遺物を含む土層は確認できず、近現代に削平されたと思われる。だが、第19図10層などは、過去の調査例から、近世に相当する土層である可能性がある[2]。

写真51　調査区西壁



第19図　基本土層断面図

《土層注記》

1.赤茶褐色土(現代土層１)、2.褐色土(現代土層２)、3.黒灰色土＋地山ブロック、4.黒灰色土＋褐色粘質土、5.黒灰色土、6.褐色土＋地山ブロック、7.暗褐色土＋地山ブロック、8.灰褐色土、9.暗褐色土、10.灰褐色砂質土、11.暗褐色土、12.茶褐色土、13.茶褐色土＋赤色粒(SK01埋土)、14.黒褐色土(SK01埋土)、15.暗茶褐色土＋赤色粒(P35埋土)、16.15層＋炭化物(P35埋土)、17.暗茶褐色土＋地山ブロック(P35埋土)、18.暗褐色土

3．遺構と遺物

調査区全体に攪乱が存在していたため、遺構・遺物の残存状況は悪かった（第18図・写真49・50）。

遺構はほとんどが基盤層上面での検出となった。土坑（ＳＫ）３基、ピット61基、土坑状の落込み（ＳＸ）１基を検出した。遺物はコンテナケースにして２箱程出土した。ＳＫ３基、ＳＸ１基、ピット35基、包含層からの出土である。概ね古墳時代～古代に属するもので、中世以降の遺物は確認できなかった。ほとんどが破片資料で、器形全体を知り得る遺物はごく少数である。（第21図／写真57／表９・10）

ＳＫ01（写真52）

調査区西端に位置する。一部調査区外に続くため正確な形状はわからないが、方形に近い形状を呈するものと思われる。埋土は暗褐色の締まりのある土に地山ブロックと焼けた粘土のような赤色粒が混じる。遺構の性格は不明である。

遺物は少ない。縄文土器・須恵器・土師器・灰釉陶器の小破片が少量出土している。赤焼けの須恵器の椀（第21図１）が唯一器形を知り得る資料である。底面に近い埋土中の出土で、径の小さい底部、多少丸みが残るが直線的な体部、外反する口縁部に灰釉陶器の影響が窺える[3]。

この遺構の具体的な時期ははっきりしないが、９世紀後半以降に比定される尾張系の灰釉陶器の小片が出土している。

ＳＫ02（写真53・54）

調査区のほぼ中央に位置する。方形を呈するが北西角の立ち上がりは確認できなかった。埋土はＳＫ01と同様、遺構の性格は不明。

出土遺物は縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器の小破片である。量的には土師器片が多く、甕の胴部破片に混じり、甑の把手（第21図８）等も出土している。また、白色軟質で外面に縄目と思われるタタキ目をもつ須恵器片が数点出土している[4]。後述のＳＸ01からもこれとよく似た資料が出土している。

所属時期は不明瞭だが、埋土がよく似ていることからＳＫ01とほぼ同時期かと思われる。

写真52　ＳＫ01遺物出土状況（東から）

写真53　ＳＫ02完掘状況（東から）

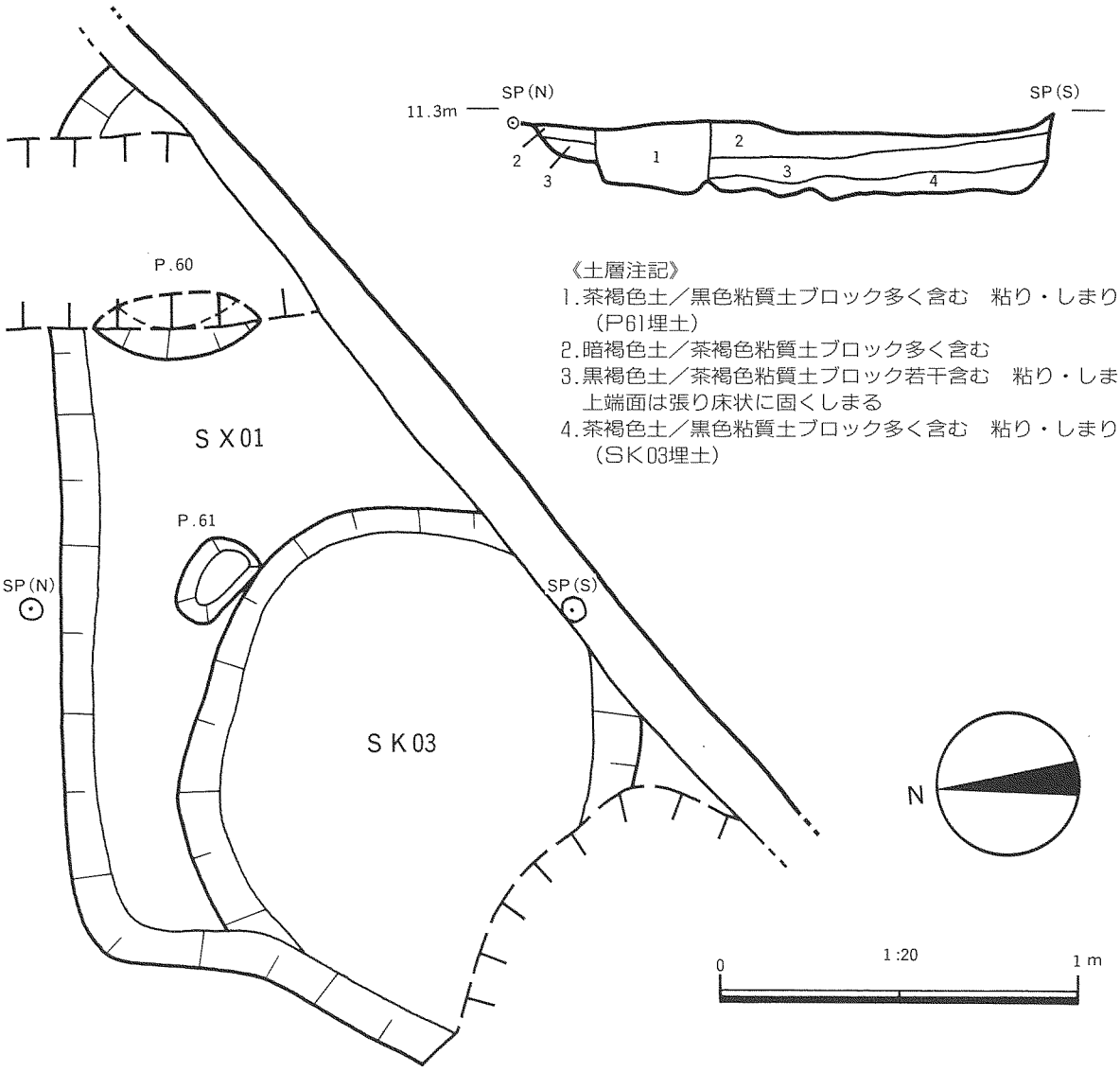
写真54　ＳＫ02断面（西から）

ＳＸ01（第20図／写真55）

調査区の南端に位置する。調査区外に遺構範囲が及んでいるため、全体の形状は正確に捉らえられない。埋土は黒みが強い暗褐色粘質土に地山ブロックと赤色粒が混入したものである。検出段階では、推定される遺構範囲の大きさや形状から、住居址の可能性も考えていたが、周溝などの特徴的な付属施設を伴わなかったため、性格不明の遺構としてＳＸとした。

また、ＳＸ01を検出した段階では確認できなかったのだが、精査するうちにＰ60・61を、断面の状況からＳＫ03をそれぞれ検出した。ピットはどちらもＳＸ01よりも後の掘削である。ＳＫ03はＳＸ01に切られていることから、ＳＸ01に先行すると判断した。しかし検出が遅れてしまったために遺物はＳＸ01のものと混同してしまい、ＳＫ03の詳細は把握できなくなった。

写真55　ＳＸ01断面（西から）



第20図　ＳＸ01遺構状況図

遺物は、このため、ＳＸ01としてＳＫ03に属するものも取上げている。量はあるが小破片の資料が主である。弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器の破片が出土している。なかでも須恵器片が目立ち、古墳時代に属するものが多い（例として第21図10～12など）。縄のタタキ目（同図16）などの、いわゆる初期須恵器の特徴をもつ破片も数点あった。同図17・18は16と同じくタタキ目に特徴があるが、これは土師器胎土に施されている。また図示しなかったが韓式系土器らしい小片も１点出土している

遺構の時期は、９世紀後半以降の尾張系灰釉陶器の小片が埋土上部（第20図２層に相当する）より出土していることからＳＸ01が古代、ＳＫ03はそれ以前に属すると思われる。

ピット

ピットは全部で61基検出した。そのほとんどは地山面で検出した。地山面からの掘削の深さは浅いものが多いが、Ｐ２・８・９・18・19・23・48はかなり深く掘りこまれており、およそ40～50cmを測った。

しかし、掘立柱建物跡などのなんらかの意味を示すような配列は確認できなかった。

ピットは調査区全域で検出したが、南西部分では１基も存在していない。大きな攪乱が多いこともあるが、もともと希薄な部分だったと考えられる。

写真56　Ｐ９遺物出土状況

遺物が出土したピットは35基と検出総数の約半数である。ほとんどは破片資料、しかも小破片が単独で出土している。そのなかでＰ９は、埋土上部より須恵器平瓶胴部破片（第21図４）、埋土中ほどから須恵器杯蓋（同図２）・土師器甕胴部破片（同図14）といった、比較的残りのよい資料が出土しており、目立つ存在である（写真56）。遺物が数量的にまとまっているピットとしては、Ｐ９のほか、Ｐ１・８・23・26・35・48・52がある。これらのピットは須恵器片・土師器片を主体的に出土しているが、どちらかというと土師器片の方が多い。またＰ35は須恵器の蓋ツマミ部分（同図３）など２、３点須恵器片が出土しているが、そのほかの十数点は８世紀代の甕の破片（同図19～21）で占められている。

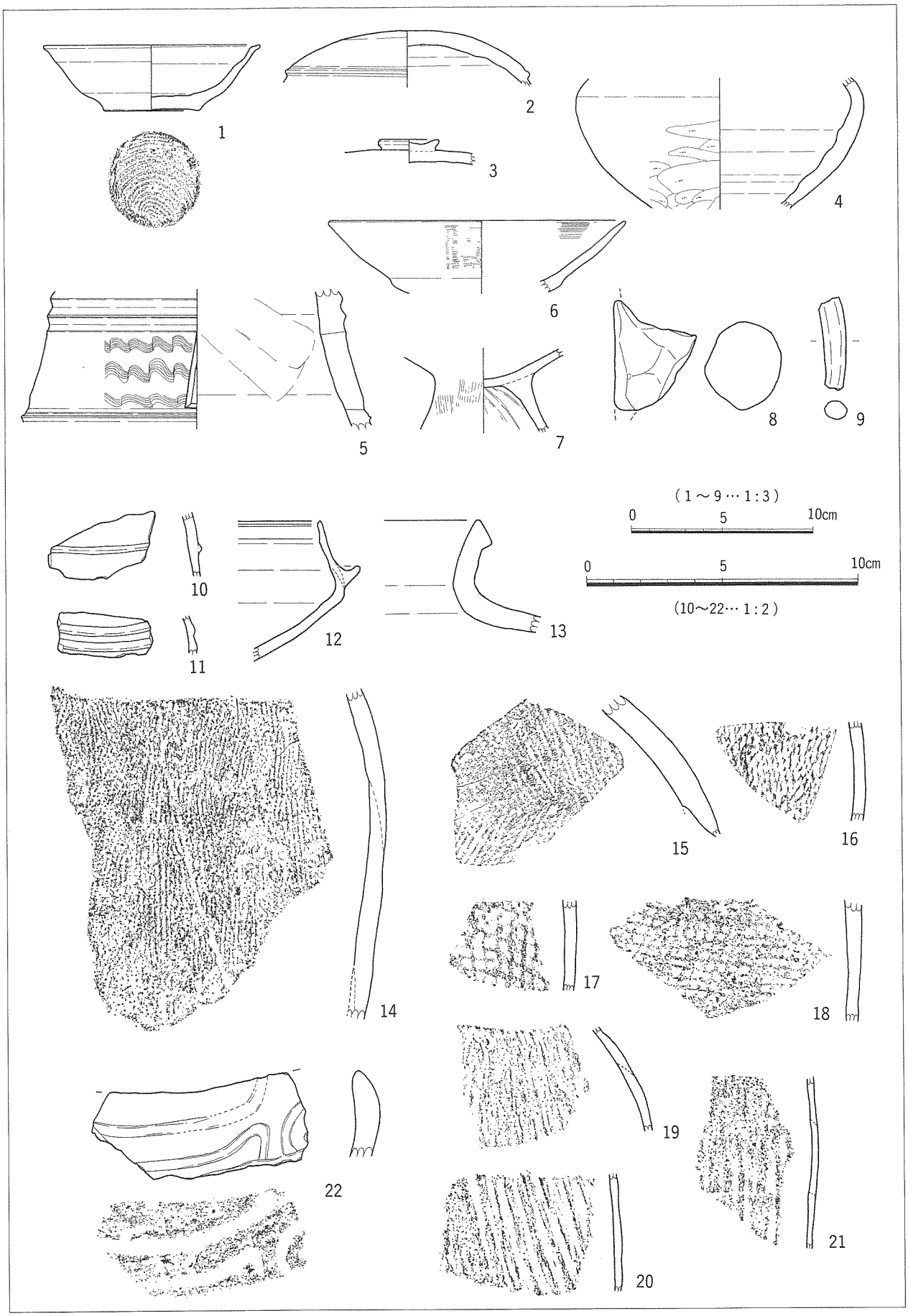
ピットの詳細な時期は、全体的にはっきりしないが、ほとんどのピットの埋土は黒褐色～暗茶褐色を呈し地山ブロックなどが混じるといった共通性がある。包含層によく似た土であることから、多くのピットは古墳時代～古代に属するものと思われる。

包含層

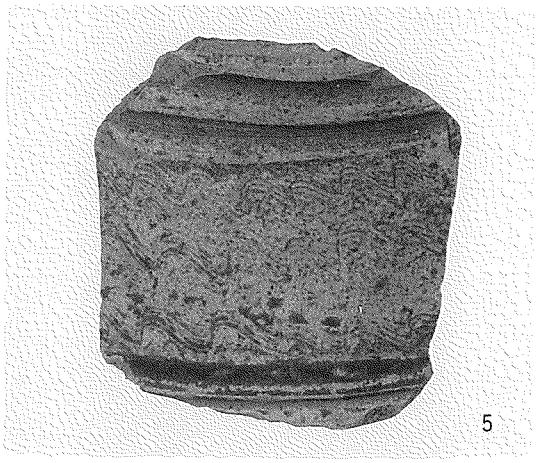
包含層の残存状況が悪かったことは既に述べたが、遺物は縄文土器～灰釉陶器にいたるまでの破片資料が出土している。須恵器片・土師器片が多かった。第21図５は須恵器高杯形器台の一部である。破片資料だが、その左右と上の端部は透かしの部分にあたるようで、丁寧に仕上げられている。また、正木町遺跡では過去何度か縄文土器片が出土しているが、同図22は珍しく文様が残る。深鉢の口縁部であるが、その沈線文から縄文時代中期末に比定できると思われる[5]。

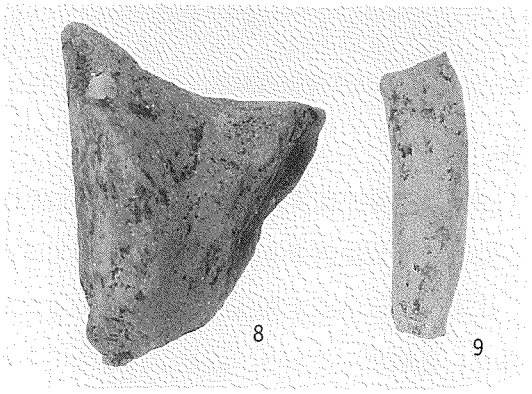
遺構名	埋　　土	形状	出土遺物	備　　考
Pit 1	黒褐色（粘質）	円	弥生土器・須恵器・土師器	
2	黒褐色（粘質）＋地山ブロック	楕円	須恵器・土師器	
3	黒褐色（粘質）＋地山ブロック	楕円	土師器	
4	黒褐色（粘質）＋地山ブロック（少）		弥生土器？	一部調査区外
5	黒褐色（粘質）＋地山ブロック（少）		土師器	一部調査区外
6	暗褐色＋地山ブロック（多）	円	須恵器	
7	暗茶褐色	円		
8	暗茶褐色	円	須恵器・土師器	
9	黒褐色（粘質）	楕円	須恵器・土師器	
10	暗茶褐色＋地山ブロック（少）／赤色粒	楕円	弥生土器・土師器	
11	暗褐色＋地山ブロック（多）	楕円		
12	黒褐色（粘質）	円	須恵器・土師器	
13	黒褐色（粘質）		須恵器・土師器	一部調査区外
14	暗茶褐色＋地山ブロック			
15	暗茶褐色＋地山ブロック（少）／赤色粒	円	土師器	
16	暗褐色	円		
17	暗褐色＋地山ブロック	円	弥生土器	
18	黒褐色	円	須恵器	
19	黒褐色		土師器	
20	暗褐色＋地山ブロック	方形		
21	茶褐色	方形	土師器	
22	暗褐色＋地山ブロック（少）	楕円		
23	暗茶褐色＋赤色粒		須恵器・土師器	
24	暗褐色＋地山ブロック（少）			一部調査区外
25	茶褐色＋地山ブロック	円	土師器	
26	黒褐色	円	土師器	
27	茶褐色＋地山ブロック	楕円	須恵器・土師器	
28	暗褐色＋地山ブロック	方形	須恵器・土師器	
29	暗褐色＋地山ブロック	円	須恵器・土師器	
30	暗褐色＋地山ブロック	円		
31	灰褐色			近世以降か
32	暗褐色＋地山ブロック	楕円		
33	暗褐色＋地山ブロック	円		
34	暗褐色＋地山ブロック（多）	円	弥生土器・土師器	
35	暗茶褐色＋赤色粒	方形	須恵器・土師器	
36	暗褐色		土師器	
37	暗褐色			
38	暗褐色＋地山ブロック（多）	円		
39	暗茶褐色＋地山ブロック	円		
40	暗茶褐色＋地山ブロック	円	土師器	
41	暗褐色＋地山ブロック	楕円		
42	暗茶褐色＋地山ブロック（多）	楕円	土師器	
43	灰暗褐色＋地山ブロック	円		近世以降か
44	暗褐色＋地山ブロック			
45	暗褐色＋地山ブロック	方形	土師器	
46	暗茶褐色～茶褐色	楕円	土師器	
47	暗茶褐色＋地山ブロック（多）			
48	暗茶褐色＋地山ブロック（少）／赤色粒	円	縄文土器・土師器	
49	茶褐色＋地山ブロック			
50	暗褐色＋地山ブロック		須恵器・土師器	
51	黒褐色（粘質）			
52	灰暗褐色＋地山ブロック		土師器	P54埋土上面検出
53	暗茶褐色＋地山ブロック	長方形	土師器	
54	暗茶褐色＋地山ブロック（少）／赤色粒			
55	暗茶褐色＋地山ブロック			
56	暗茶褐色＋地山ブロック	円		
57	暗褐色＋地山ブロック		須恵器	
58	暗茶褐色＋地山ブロック		土師器	
59	暗褐色			ＳＫ01埋土下面検出
60	茶褐色＋地山ブロック（多）		弥生土器	ＳＸ01埋土下面検出
61	茶褐色			ＳＸ01埋土下面検出
ＳＫ01	暗褐色＋地山ブロック／赤色粒	方形	縄文土器・須恵器・土師器・灰釉陶器	一部調査区外
02	暗褐色＋地山ブロック／赤色粒	方形	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器	
03	茶褐色＋黒褐色粘質ブロック		ＳＸ01と混同	ＳＸ01埋土下面検出
ＳＸ01	暗褐色＋地山ブロック		弥生土器・須恵器・土師器・灰釉陶器	一部調査区外

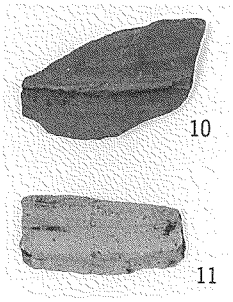
第9表　9次調査検出遺構一覧（番号は第18図対応）

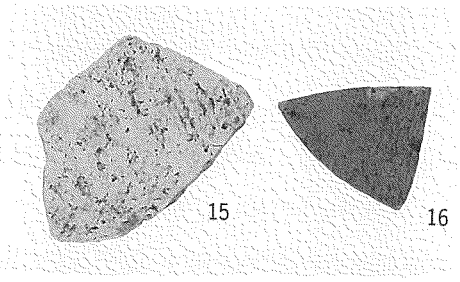

1
2
3
4
5
6
7
8
9
(1～9…1:3)
0
5
10cm
0
5
10cm
(10～22…1:2)
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22

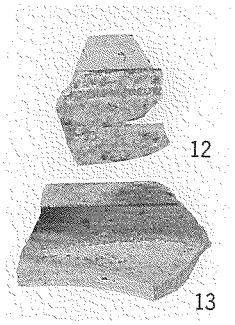
第21図　出土遺物

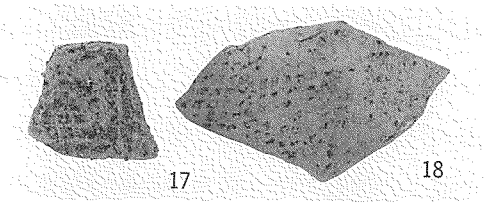












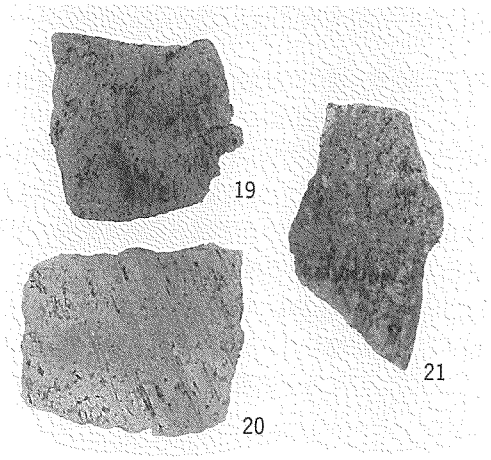


写真57　出土遺物（番号は第21図に対応）

番号	出土位置	種　別	器　種	残存部分	色　調	調　　整	時　　期
1	ＳＫ01	須恵器	椀	口縁部～底部	赤～灰褐色	器形に灰釉陶器の影響／猿投窯産	9世紀前半
2	Ｐ9	須恵器	杯　蓋	天井部	灰青白色	回転ヘラケズリ	6世紀後半～7世紀前半
3	Ｐ35	須恵器	杯　蓋	天井部（ツマミ）	明褐色	回転ヘラケズリ	8世紀中葉（古）
4	Ｐ9	須恵器	平　瓶	胴部	暗青灰色	下半ヘラケズリ	7世紀前半
5	包含層	須恵器	高杯形器台	体部	白灰色	指の沈線／櫛描波状文／スカシ	
6	Ｐ48	土師器	坩	口縁部～体部	淡赤褐色	ナデ	
7	Ｐ52	土師器	台付甕	胴、台部接合部	淡赤褐色	ハケのあとナデ／台部内面ケズリ	
8	ＳＫ02	土師器	長胴甕等	把手	赤褐色	ユビナデ／ユビオサエ	
9	包含層	須恵器	コップ形	把手	淡灰色	ユビナデ	
10	ＳＸ01	須恵器	－	－	青灰色	貼付突帯	
11	ＳＸ01	須恵器	－	－	淡青灰色	貼付突帯２条／ナデ	
12	ＳＸ01	須恵器	杯　身	たちあがり部分	青灰色	薄手／口縁部内面一段薄い	6世紀後葉
13	Ｐ1	須恵器	甕	口縁部～頸部	暗灰色	自然釉／口縁部断面は三角形	8世紀後半～9世紀
14	Ｐ9	土師器	長胴甕	胴部	茶褐色	タテハケ／内面上下方向の板ナデ	6世紀後半～7世紀前半？
15	Ｐ23	須恵器	－	胴部	白色	縄目タタキ	
16	ＳＸ01	須恵器	－	胴部	暗青灰色	縄目タタキ	
17	ＳＸ01	土師器	－	胴部	淡橙褐色	格子目タタキ	
18	ＳＸ01	土師器	－	胴部	淡褐色	格子目タタキ	
19	Ｐ35	土師器	甕	胴部	赤褐色	粗いハケ／薄い器壁	8世紀　尾張型[6]
20	Ｐ35	土師器	甕	胴部	淡赤褐色	粗いハケ／薄い器壁	8世紀　尾張型
21	Ｐ35	土師器	甕	胴部	褐色	粗いハケ／薄い器壁	8世紀　尾張型
22	包含層	縄文土器	深　鉢	口縁部	淡褐色	沈線文	縄文中期末

第10表　9次調査遺物観察表（番号は第21図対応）

4．小結

第9次調査の結果を、今回の地点から南北100m以内で実施された①昭和57年度正木小学校試掘調査、②伊勢山中学校遺跡第4次調査と比較してみる（第4図参照）。

①の地点は本調査地点の北向かいにあたり、近世・近代の遺構遺物と黒褐色土包含層（ただし未調査で保存）を検出しており、近接した部分であるが土層状況は今回と異なっている。これは、①地点は明治40年以降学校敷地（グラウンド）として、本地点は戦後公園整備されるまで宅地として活用されたという違いによる（付編参照）。今回現代土層とした部分には、大量の炭化物や建築廃材とともに須恵器・土師器片が混入していたが、これは公園整備の際に掘削し、撤去された建物のゴミも一緒に土均しをしたためと思われる。しかし、本調査や①地点での結果から、この付近では攪乱を受けていても黒褐色土包含層は現存している可能性が高いと考えられる。

本調査地点の南100mに位置する②の地点では、大規模な中世溝が調査区全体に走っている状況が検出された。この溝は調査区北壁に抜けていたため、今回の調査で続く部分や何かしら関連のある中世遺構が検出される可能性はあった。しかし今回の調査では、中世溝特有の埋土に相当する土層[7]や中世に属する遺構遺物は見られなかった。攪乱が多かったことを考慮しても、もともと存在しなかった可能性の方が高い。今後この付近の中世溝の平面的な展開やこの時期の土地利用を考える上で、一つの手掛かりになるだろう。

註1）現代土層1には塩化ビニール製排水管等、現代土層2には土管・昭和16年の一銭硬貨・戦時中によく使用された粗悪な建築部材等がみられる。

註2）正木町遺跡では灰褐色土から近世遺物が出土することが多い。

註3）尾野善裕氏のご教示による。また、灰釉陶器片等についてもご助言いただいた。

註4）接合できなかったが同一個体の可能性が高い。表面の状態は悪く、器種は不明。

註5）当館学芸員・伊藤正人の観察による。

註6）城ケ谷（1990）の文献による。

註7）正木町遺跡ではこれまでに、第3・4・6・8次および1996年の南山大調査で中世溝が検出されている。市教委調査分についてはその報告で、中世溝の埋土は地山ブロックが均一に混じる茶褐色土とある。

付編　近世以降の正木町遺跡付近の様相

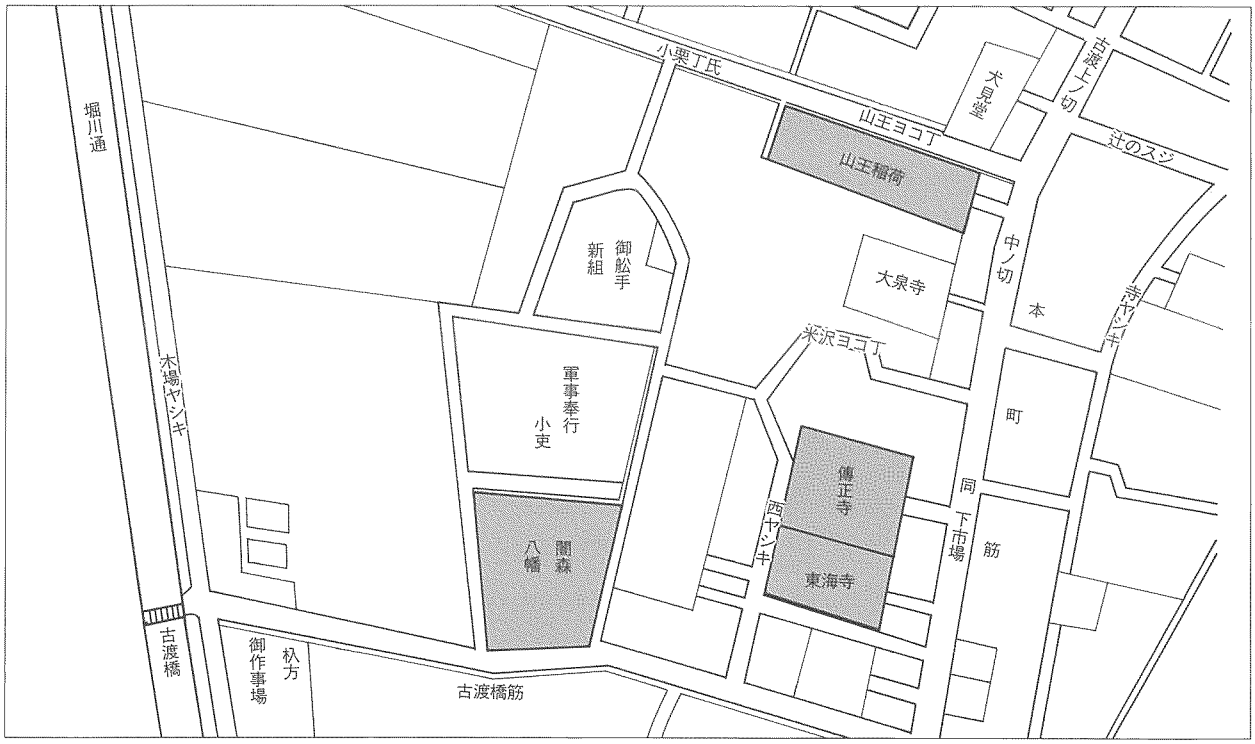
正木町遺跡では小規模な発掘調査が多く、どの時代についても断片的にしか把握できないのが現状である。しかし、近世以降については文献や絵図等の資料と発掘調査の成果と照らし合せることで、人々の暮らしぶりをかなり詳しく知ることができる。正木町遺跡での調査は今後も断続的に行われていくと思われ、調査の際の手掛かりになるよう、まとめにかえて近世以降の遺跡付近の様相を簡単にだが触れておく。

正木町遺跡の範囲は、現在の古渡町および正木一・二丁目付近で、山王通を北限、伏見通を東限、堀川東岸の台地上を西限、闇森八幡社の裏道より一本北の路地あたりを南限としている(第4図参照)。ここではやや南限を延ばして古渡橋に続く道まで含め、この区域の移り変わりを見ていこうと思う。

江戸時代　この区域は愛知郡古渡村の一画であった。古渡の名は、かつてこの里の西の入り江から海部郡大口尊へ参拝客が渡航していたことに由来する。堀川開削の際に多少耕地面積が減ったものの、田畑が広がる農村であった。1664(寛文4)年、古渡橋上流の堀川沿いに木場がおかれ、木場屋敷とよばれる町屋ができた。木材関連業の始まりである。しかし、遺跡範囲である台地上には畑地が広がっており、家屋は少なかったようだ。35年後の1709(宝永6)年に描かれた『尾府名古屋図』では堀川岸に「御材木場」とあるが、その他は「闇森八幡」「(山王) 稲荷」以外に畑とあるだけである。しかし、名古屋城下が繁栄拡大するにつれ、熱田神宮へと続く道 (本町筋、いまの伏見通) 沿いにあったこの村は徐々に都市化していった。1726(享保11)年、本町筋付近は町方支配となり城下とほぼ同じ扱いとなる。数年後の1732(享保17)年には山王稲荷の南に葛町遊廓も作られている。寺院や町屋も増加し、武士の下屋敷も点在していたことが明和・安永年間(1764～1781)に作成された『尾州名古屋御城下之図』からも窺える。天保年間(1830～1844)には本町筋沿いに寺院と町屋が並び、その西には武家下屋敷が並ぶ西屋敷筋ができ、堀川沿いには木場が集中する (第22図)。しかし「農商兼たる者」が多く、闇森八幡社の北付近には畑地が残っていた。

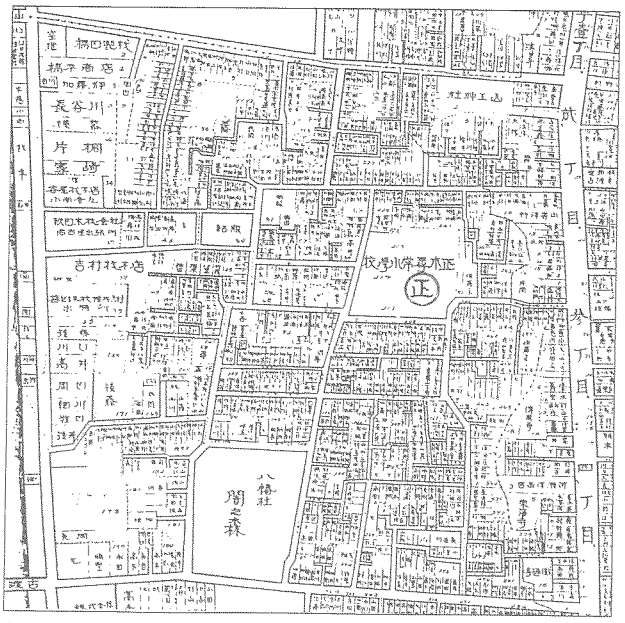
明治・大正時代　1871(明治4)年廃藩置県が行われ、この区域は名古屋県古渡村となった。その後古渡村から古渡町・正木町として独立し、1878(明治11)年・1889(明治22)年・1908(明治41)年に行政区分・名称が変更になっている。このころ、堀川沿いに製材・木工業が繁栄し、本町筋は商店街として賑った。細い路地が増加し、宅地化が進み小規模家屋が建てこんでいた。1885(明治18)年前後の地籍図では(第23図)主な道筋は変化がないが、畑地が減って島状に残っている状態である。明治の終わり頃、大津通 (東別院の東の通) に市電が開通すると、本町筋の商店街が東へ移動していき、ますます住宅地としての性格を色濃くしていく。なお、1907(明治40)年に正木小学校が現在の敷地に創立されている。

昭和時代　1933(昭和8)年ごろの地図では(第24図)、畑地はほぼ消滅し、かなり込入って家々が並ぶが主な道筋は相変わらずである。戦時中は、市街地や南方 (現在の伊勢山中学校のあたり) の東洋紡績名古屋工場を目標とした空襲で被害を受けている(第25図)。最も被害を受けたのは1945(昭和20)年5月17日の空襲であった。空襲から避難するための防空壕を各家屋の下につくっていたようで、現在の正木公園部分では家屋が消失し、防空壕がむき出しになった上にバラック小屋を建ててしばらく人々が暮らしていたらしい。戦後、復興事業の一環で区画の再整理が行われ、主たる道路の拡張や路地の整理、正木公園の整備などがおこなわれ、現在の区画となった。現行の住居表示になったのは1980(昭和55)年である。戦後も敷地面積が狭い家屋が立ち並んでいたが、次第に町工場や事務所、集合住宅に変りつつある。

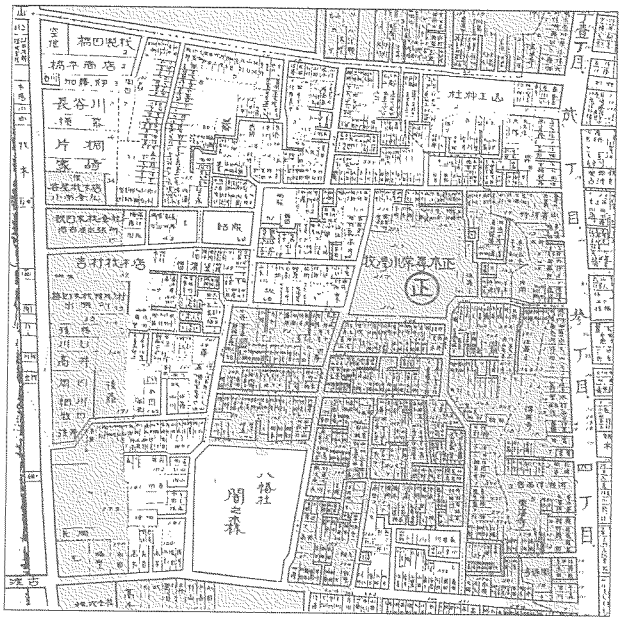


第22図　天保年間（1830～1844）年頃の様子

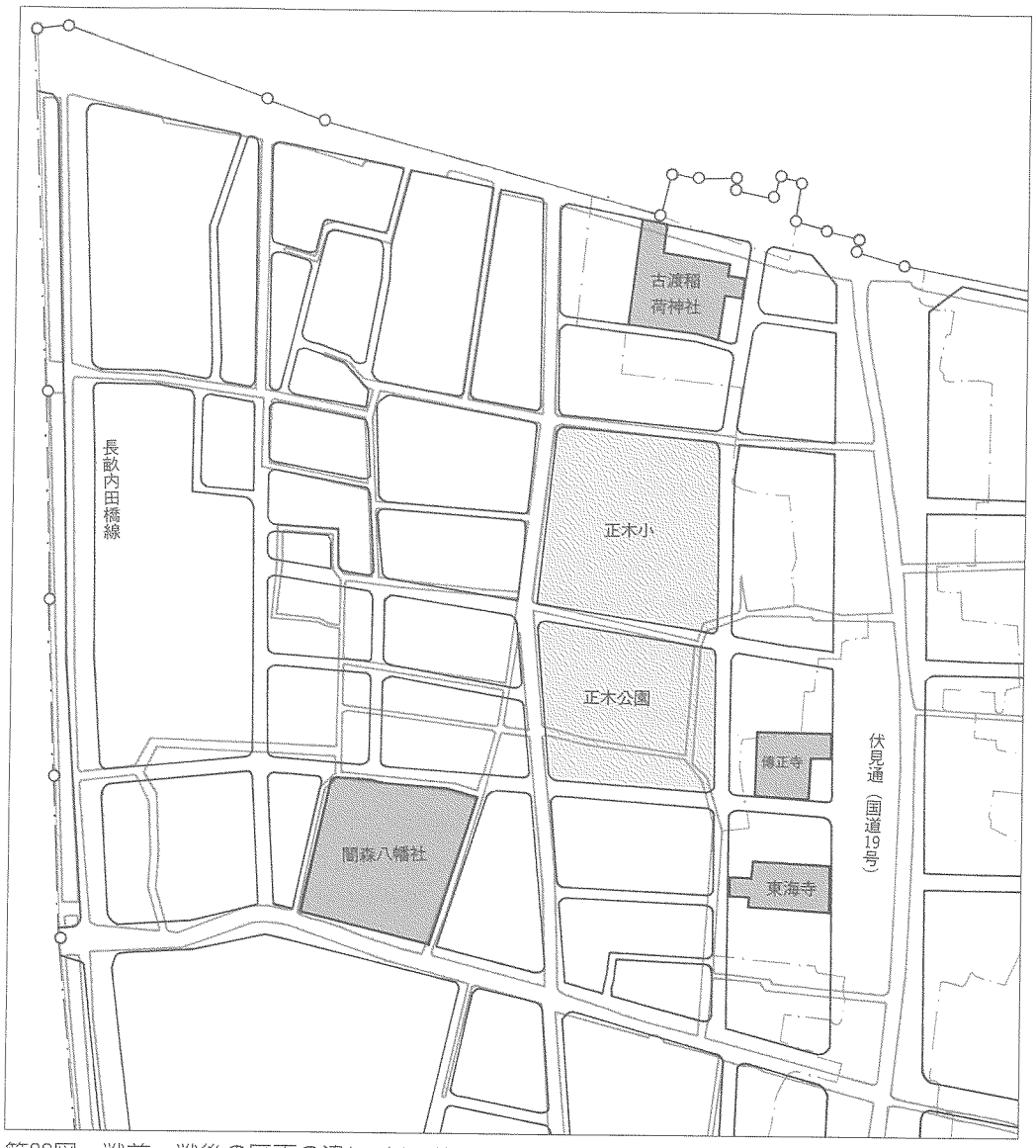
第23図　明治18（1885）年頃の様子（トーン部分が畑　1：4000）



第24図　昭和8（1933）年頃の様子



第25図　空襲による焼失範囲（アミフセ部分）



第26図　戦前・戦後の区画の違い（淡い線が戦前　1：4000）

参 考 文 献

正木町遺跡について

稲垣晋也　1957　「愛知県名古屋市正木町遺跡」『日本考古学年報』 5

伊藤禎樹　1969　「正木町遺跡調査速報」『名古屋考古学会会報』 2

伊藤禎樹　1991　「尾張正木町遺跡出土の初期須恵器」『韓式土器研究』III

名古屋市教育委員会　1983　『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会　1986　『正木町遺跡発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会　1988　『正木町遺跡第２次発掘調査概報』

名古屋市教育委員会　1989　『正木町遺跡第３次発掘調査概報』

名古屋市教育委員会　1991　『正木町遺跡第４次発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会　1996　『正木町遺跡－第５次調査の概要－』

名古屋市教育委員会　1996　『正木町遺跡第６次発掘調査概要報告書』

伊勢山中学校遺跡について

名古屋市教育委員会　1984　『伊勢山中学校遺跡発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会　1985　『伊勢山中学校遺跡Ⅱ－昭和59年度校舎増築に伴う発掘調査の概要－』

名古屋市教育委員会　1987　『伊勢山中学校遺跡第３次発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会　1989　『伊勢山中学校遺跡－第４次調査概報－』

名古屋市教育委員会　1996　『埋蔵文化財調査報告書24　伊勢山中学校遺跡（第５次）』

名古屋市教育委員会　1997　『伊勢山中学校遺跡－第６次発掘調査の概要』

正木町遺跡周辺の地理について

小田切忠近　1841　『天保年間名古屋市街図』

梶川勇作　1997　『近世尾張の歴史地理』　企画集団ＮＡＦ

名古屋市　1916　『名古屋市史』地理編

1933　『名古屋市居住者全図』

名古屋市立正木小学校　1979　『まさき』

名古屋市土木局　1987　『愛知県名古屋区地籍全図（復刻版）』

名古屋市計画局　1984　『戦災復興誌』

名古屋市計画局　1992　『なごやの町名』

愛知県陶磁資料館　1995年　『名古屋のやきもの』

あいち・平和のための戦争展　1996　『戦時下・愛知の諸記録96』

尾野善裕　1997　「猿投窯と西三河の窯跡」『第１回三河考古合同研究会　須恵器から灰釉陶器へ－生産地と消費地から－』三河考古刊行会

尾野善裕　1997　「尾張・西三河(窯跡)　猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1　７世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会

齊藤孝正　1995　「Ⅰ　東海西部（愛知・岐阜)」『須恵器集成図録』第３巻・東日本編Ⅰ

城ヶ谷和広　1990　「古代尾張の土師器～６世紀後半から11世紀の様相～」『年報・平成２年度』㈶愛知県埋蔵文化財センター

杉村啓治　1994　「美濃焼物と西浦円治」『美濃の古陶　美濃古窯研究会報№７』美濃古窯研究会

永井宏幸　1996　「大毛沖遺跡からみた古代の土器」『大毛沖遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集

名古屋空襲を記録する会　1979　『名古屋空襲誌第６号』

名古屋市教育委員会　1998　『埋蔵文化財調査報告書28　小幡遺跡（第１・２次)』

名古屋市教育委員会　1994　『東古渡町遺跡第５次発掘調査概要報告書』

藤沢良祐　1984　「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』III

藤沢良祐　1991　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ

宮腰健司・古橋佳子　1991　「大渕遺跡出土の土錘について」『大渕遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

名古屋市文化財調査報告　既刊目録

Ⅰ	H-101号古窯跡発掘調査報告	1973
Ⅱ	古沢町遺跡発掘調査報告　－弥生時代編－	1974
Ⅲ	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974
Ⅳ	有松町並み調査報告	1975
Ⅴ	ＮＫＩ-34号古窯跡発掘調査報告	1975
Ⅵ	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976
Ⅶ	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1979
Ⅷ	小幡古墳発掘調査報告書	1980
Ⅸ	ＮＮ-278号古窯跡発掘調査報告書	1981
Ⅹ	民俗文化財調査報告書(名古屋市内の山車と神楽)	1981
Ⅺ	ＮＮ-314号古窯跡発掘調査報告書	1981
Ⅻ	ＮＮ-282号古窯跡発掘調査報告書	1982
XIII	ＮＮ-268号古窯跡発掘調査報告書	1983
XIV	笹ケ根古墳群発掘調査報告書	1984
XV	民俗文化財調査報告書(名古屋の石造物)	1985
XVI	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985
XVII	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985
XVIII	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986
XIX	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986
XX	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987
21	白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書	1989
22	志段味地区民俗調査報告書	1989
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993
25	鳴海地区須恵器窯発掘調査報告書	1994
26	名古屋市山車調査報告書１(筒井町湯取車)	1994
27	ＮＮ330号窯発掘調査報告書	1994
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994
29	名古屋市山車調査報告書２(若宮まつり　福禄寿車)	1995
30	名古屋市山車調査報告書３(牛立天王まつり　牛頭天王車)	1996
31	埋蔵文化財調査報告書24(伊勢山中学校遺跡　第５次発掘調査)	1996
32	埋蔵文化財調査報告書25(高蔵遺跡　第８次・第９次他)	1996
33	名古屋市山車調査報告書４(有松まつり　布袋車・唐子車・神功皇車)	1997
34	埋蔵文化財調査報告書26(高蔵遺跡　第12次～第15次)	1997
35	埋蔵文化財調査報告書27(天白元屋敷遺跡　第３次)	1997
36	埋蔵文化財調査報告書28(小幡遺跡　第１・２次)	1998
37	名古屋市内寺院の仏画	1998
38	埋蔵文化財調査報告書29(正木町遺跡　第７次～第９次)	1998

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	正木町遺跡(第7次～第9次)
巻次	29
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	38
編著者名	伊藤厚史・田原和美
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026　愛知県名古屋市南区見晴町47　TEL 052-823-3200　FAX 052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号　TEL 052-972-3268　FAX 052-972-4178
発行年月日	西暦　1998年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
まさきちょういせき 正木町遺跡	なごやしなかくまさき 名古屋市中区正木 にちょうめ 二丁目804	23100	7-19	35° 08′ 44″	136° 53′ 44″	1997.4.7～ 1997.4.22	約80	倉庫
	なごやしなかくまさき 名古屋市中区正木 にちょうめ 二丁目1119-3			35° 08′ 46″	136° 53′ 54″	1997.9.1～ 1997.10.3	約80	個人住宅
	なごやしなかくまさき 名古屋市中区正木 にちょうめ　まさきこうえん 二丁目12正木公園 ない 内			35° 08′ 47″	136° 54′ 44″	1997.11.25～ 1997.12.19	約100	防火水槽

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正木町遺跡	散布地 貝塚	中世 近代	ピット	須恵器片 陶器片	第7次調査
		中世 近代	溝 待避所	臼玉・山茶碗	第8次調査
		古墳時代 古代	ピット 土坑	須恵器片 土師器片	第9次調査

名古屋市文化財調査報告38

埋蔵文化財調査報告書29

正木町遺跡(第7次～第9次)

1998年3月20日発行

編集　名古屋市見晴台考古資料館

発行　名古屋市教育委員会

名古屋市中区三の丸三丁目1番1号

印刷　株式会社　名古屋大気堂